おみよ。みて上げて下さい。――姉さんは盛岡へ……

政　吉。……

おみよ。この手紙は仙臺で書くけれど。――これのそつちへ行く時分には、もう、こゝにはゐない……

政　吉。……（ふと肯へない表情）

おみよ。さう書いてあります。――みて上げて……（滲んでくる泪をそつと拭く。――手紙を猫板のうへに置く）

政吉、無言、手紙をとり上げる。――讀む。――このうち、おみよ、取返しのつかないことをした悔と悲しさとがいまさらのやうに胸に滿ちて來る。――と一しよに忍泣きの聲がだん〳〵たへられないやうに高くなる……

おみよ。……す、すまないことをしました。――どうしたら――ど、どうしたらわたしいゝでせう。

（泣く）

政　吉。……

おみよ。姉さんを、そんな、盛岡なんかへ。――そんな盛岡なんて遠いところへやつたのは――やるやうにしたのはわたしです。――みんなわたしが悪いんです……

政　吉。……

おみよ。わたしが人にしやくられたばかりに。――いゝえ、しやくられたのもわたしが悪いからです。――もと〳〵わたしが淺墓だつたからです……

政　吉。……

おみよ。わたしがあんな端下ない眞似さへしなければ。――端下ないお金のことなんぞいひ出しさへしなければ、姉さんはどこへも行きやアしませんでした。――仙臺へだつて歸りやアしませんでした。――仙臺へ歸れば姉さんは。――いろ〳〵もう姉さんは……

政　吉。……

おみよ。でなくつても姉さんのあとを追ツかけて、あくまで姉さんを食ひものにしようとする悪い奴が仙臺から出て來てゐたんです。――始終、電話をかけてよこしたりしたのはその奴だつたんです。――わたしは知つてゐました。――それをわたしは知つてゐました。――盛岡へも必とその奴に連れて行かれたんです……

政　吉。……

おみよ。姉さんは體が悪いんです。――さうでなくつてもこのごろまた悪いんです。それをそんな――これから寒くなるばかりだといふのにそんな。――姉さんは死にます。――死にます。――

必と死にます……

政　吉。……

おみよ。さうなれば。――もしさうなればわたしです。――姉さんを殺したのはわたしです。――わたしが姉さんを殺したんです……

政　吉。……

おみよ。だのに、――だのに姉さんはそんな。――そんな優しいことをいつて來て。――どうして恨んぢやアくれないでせう。――恨んぢやアくれないんでせう。――わたし、もう。――わたしは、もう……

政　吉。……

おみよ。いくら體が甲斐なかつたといつて――ほんたうでなかつたといつて――人の要らざる口の端にのつて根も葉もない――根も葉もないことをいひ散らすなんて。――すみません。――すみません。――ほんたうに、わたし……（咽ぶやうに泣く）

間。

政　吉。……さうぢやアねえ。――いゝや、さうぢやアねえ……

おみよ。いゝえ。――いゝえ、さうです。――さうです……（泣きつゞける）

政　吉。……ぢやアねえ。――さうぢやアねえ。――（低く）俺が惡かつた……

おみよ。いゝえ、あなたは。――あなたは何にも。――あなたの惡いことは何にも……

政　吉。いゝや、惡かつた。――お前にかくしていろ〳〵した俺が惡かつた。――おすがさんは、おみよ。いゝえ、さうぢやア。――そんなことぢやア……

政　吉。（押へるやうに）さうなんだ。――俺には分つてゐるんだ……

おみよ。……（政吉の顏をみる）

政　吉。おすがさんを仙臺から呼ぶには、眼にみえて、二千幾らといふ金がそこになくつちやアいけなかつた。――その位なことはどうにもなる。――わけなく請合ひはしたものゝしがくがつかねえ。――恩人だ、恩返しだ、なまじさういふ賣込をしたゞけいまさらそんな金が要る。――何の仲でもさうまでお前にはいへねえ、――俺はさう思つた……

おみよ。なぜ、あなた、そんな……

政　吉。それから茅町の、伯父にはいはねえ、伯母に話した。――いやア伯母は親身だ。――と思つたのがいまになりやア油斷だつたんだが、みかけた山がある、すぐに持つて來る、さういつて内密に千兩まはしてもらつた。――それがあの手形よ。

おみよ。……（眼をふせる）

政　吉。それと手許を掻きあつめて三百兩こしらへた。――それをおすがさんに送つた。――おすがさんはそれで身拔きをしてこつちへ出て來た。――聞くから俺はいつた、いゝえ、あれは、おみよのほんの志で、あともすぐこしらへるといつてゐます。――だが、いふと當人がこまりまず。――だから、あなたは、どこまでも知らない顏で……

おみよ。……（泪を拭く）

政　吉。あとは自分でする、さうまで心配はかけられない。――おすがさんはいつた、――いゝから默つておいでなさい、惡いやうにはしない、二人で話は必とつける。――さうはいつたが、俺の手で、そのうへ千兩はおいて百兩のことだつて出來ない。――いまだからいふが、俺は、あぐねてまんじりとも出來ねえ晩が幾晩もあつた。……

おみよ。……

政　吉。よつぽど俺はお前にぶちまけようと思つた。――さうすれア苦患がなくなる。――さう思つて幾度お前の顏をみたか知れねえ。――が、駄目だ。――いへねえ。――どうしてもいへねえ。……

おみよ。……

政　吉。といふのが。――といふのがおすがさんに俺は惚れてゐた。――お前のいふとほり、まだおすがさんに俺は未練があつたんだ。

おみよ。それは、いゝえ……

政　吉。さうなんだ。――手めえでもさうと知らなかつたがさうなんだ。――だからつまりはそんな小細工をしたんだ。

おみよ。そんな……

政　吉。さうなんだ。――それがいけなかつたんだ。――それが一番いけなかつたんだ。

おみよ。いゝえ、それは

政　吉。堪忍してくれ。――俺が惡かつたんだ、堪忍してくれ。

おみよ。いゝえ、それは、――さうぢやアありません、それは……

政　吉。いゝえ、さうだ、さうなんだ……

おみよ。いゝえ、さうぢやアありません。――さうぢやありません、それは……

政　吉。いゝえ、さうなんだ、――さうなんだ――俺がわるかつたんだ……

政吉、湧いて來る泪を押へる。――おみよ、ともにまた泣く。

間。

多

……冷めたい雨の音。（幕）

（十五年二月）

燈下

□

權　七　左官。

おみね　權七の女房。

太　吉　同、義理ある仲の子。

市　藏　左官。

使の男

□

東　京（淺草今戸附近）

□

現　代（大正八九年ごろ）

□

四月のはじめ。夜八時すぎ。

太吉（十一二）一人、膳のまへに、時はづれのおそい夕飯をたべてゐる。――おみね（四十二三）長火鉢のまへに、ほどきものをしながらその給仕をしてゐる。

長き間。

……戸外はうす曇つてゐる。

太　吉。お茶……（茶碗を出す）

おみね。（顔を上げて）もうおしまひ？

太　吉。……（うなづく）

おみね。まだ、お前、二つだよ。

太　吉。……（うなづく）

おみね。どうしたの？――喰べられないの？

太　吉。……（うなづく。――やゝさびしく……）

おみね。可笑しいぢやアないか？――晝間つから、今日は、何にも喰べてゐないんぢやアないか？

太　吉。……

おみね。だめだよ、お前。――いまつから、そんな。――たんと喰べさせたいと思ふから、おつ母さん、今夜でもお前の好きな筍をさうやつて煮といて上げたんぢやアないか……

太　吉。……

おみね。もう一つお上り。――ね、もう一つ……

太　吉。……

おみね。かるくつけて上げよう。――ね、さうしよう。――それならいゝだらう？――喰べるだらう？

太吉。うゝん……（うべなはない）

おみね。嫌かい？

太吉。……（うなづく）

おみね。こまるねえ、ほんたうに……（ふと寂しくその横顔をみる）――どうしてさうなの、このごろ？――どこか悪いんぢやアないか？

太吉。……（かぶりをふる）

おみね。わるかつたら悪いといはなくつちやアいけないよ。――えゝ……？

太吉。……（うなづく）

おみね。（鐵瓶をとつて急須にさす。――茶碗に茶をつぐ）あいよ……（わたす）

太吉。……（うけとる。――つゝましくそれを飲む）

間。

……おもての格子あく。

外の聲。（しづかに）御免……

おみね。（炭をつぎながら）はい……

外の聲。おゐでゞございますか？

おみね。何誰？

外の聲。小柴でございます。

おみね。小柴……？――あゝ、市藏さん……

外の聲。へえ……

おみね。まア……（火箸を灰にさす。――炭斗を膝から下ろして）さア。――さア、お上り……

外の聲。へえ、有難うございます……

おみね。おみね、立つ。――太吉、いそいでおみねの顏をみる。

おみね。いゝよ、さうしといて……

おみね、よきところに菖蒲團をもつて來る。――市藏、障子をあけて入つて來る。

おみね。さア。――さア此方へ……

市藏。へえ。――へえ、有難うございます――（膳の出てゐるのをみて）あゝ、これは、御飯中で……

おみね。いゝえ、構はないんです。――これは、いま、子供が……

市藏。（遠慮ぶかく）しかし……

おみね。いゝえ、ほんたうに。——どうぞ……
市藏。さうでございますか？——では、ずかノ〳〵と。——御免下さいまし……
おみね。さア、ずつと……

市藏、座敷にとほる。——おみね、膳を片よせたりほどきものゝ始末をしたりする……

市藏。（あたりのさまをみて）小父さんは、今晩……？（心やすだての感じに）
おみね。えゝ、一寸いま……
市藏。お出かけで？
おみね。先月までは、まだ、寢たり起きたり。——どつちかといへば、まだ、床の上にゐるはうが多かつたんですけど、今月になりましたら、めつきりもう元氣が出て、床が敷いてあるとくさくさしていけないから上げてしまつてくれ。——さういつて、始終、このごろはもう起きてをります。——一日隔きに、お醫者へも、ぶら〳〵自分で歩いてまゐつてをります……
市藏。さうでございますつてね。——いえ、それは、このあひだ途中で六さんにお目にかゝりましてね……
おみね。あゝ、そんなやうな。——さういつてをりました、六も……
市藏。で、六さんに、いろ〳〵お話をうかゞひました——もう大丈夫でございます、すつかり以

前に返りました、一人でもう外へも出られます。——六さん、喜んでさういつてゞ……
おみね。えゝ。——でも、いゝえ、すぐもう戻ります。——近所まで一寸出ましたんですから……

このうち、おみね、煙草盆に火をとつて市藏のまへに置く。

市藏。（改めて）小母さん、御無沙汰をいたしました。（叮嚀なうちに親身な感じをこめる）
おみね。いゝえ、此方こそ。——たび〳〵お見舞下すつたのに、まだ、そのお禮にもうかゞひませんで……
市藏。いゝえ、飛んだ。——でも、だん〳〵その後、およろしい方で結構でございます。
おみね。有難うございます。——おかげさまでまア。——矢つ張陽氣がよくなりましたら……
市藏。……（うなづく）
おみね。いゝえ、それが、もう大丈夫だから外へ出る、いつまでうちに引つ込んでゐたら切がない。——自分からさういつて無理に出はじめたので、そんな輕擧をしたらと、まはりでみんな留めましたが聞きません。——自分の體は自分が一番よく知つてゐる。——そんなことをいつて、あなた。……（わらふ）體は癒つても强情はちツともなほりません……（茶をついで出す）
市藏。あゝ、これは。——どうぞ、もう……

太吉、つと立つて來ておみねに何かいふ。

おみね。何だねえ、お前。——小柴の兄さんにまだ御挨拶もしないで……

太吉、ぱつたりそこへ手をついて頭を下げる。

市　藏。（あいそよく）へえ、今晩は。——（おみねに）いつも、しかし、太アちやんは音無しくつて……

おみね。いま、夜學の先生から歸つたところで……。（太吉から眼を離さないでいふ）

市　藏。あゝ、それは……

おみね。夕方、お夕飯になるのが待ち切れず、頂かずにまゐつちやア歸つて來て——おかげでいつまでもお膳が片づきません……

太　吉。……（何かさゝやく）

おみね。え？——えゝ？——あゝ。——あるだらう、そこに？

太　吉。うゝん……

おみね。そんなことはないだらう？——先刻みたよ、わたし。——昨夜みてゐたあの本だらう？

太　吉。……（うなづく）

おみね。よくみて御覽。——ないことはないから。——箪笥のうへをみて御覽……

太吉、おみねのそばを離れる。——さがす……

おみね。ないかい？——あつたらう……？

太　吉。……（うなづく）

おみね。それ御覽……

太吉、さがしたそのお伽噺の本をもつて、そのまゝ消えるやうに二階へ行く。——市藏、おみね、ともにみ送るとなしみおくる……

市　藏。（ふと）どうかなさいましたか？

おみね。えゝ？

市　藏。いゝえ、太アちやん。——どこかいつもと？——いつも音無しいお子ですけど……？

おみね。（さびしく）えゝ……

市　藏。何かゝう元氣のないやうな——どこかお惡くつても……？

おみね。いゝえ、どこが惡いといふ風もみえないんですけど、何ですか、このごろ。——だん〳〵このごろ因循してまゐつて。——顏いろでもちツとも冴々してくれません……

市　藏。それは、しかし……

おみね。平生でも口かずのすくない子がよけい少くなりましたのに、この四五日、食までまた細くなりました。——べつに間のものもいたゞかないのに御飯を頂きません。——で、學校と夜學の先生へ行くほかは外へもまるで出ず。——始終、あゝ、二階へ上つて本ばかりみてをります。——

—どうしたのかさつぱり分りません……(あぐねたやうにわらふ)

市　藏。矢つ張、小父さんの。——とも〳〵小父さんのことを心配なすつた氣疲れ。……快くなつたので急に安心した。——そんなやうな、まア……？

おみね。それは、いゝえ、わたくしより誰より心配いたしたのはあの子で。——一トころ惡いさかりなんぞ、それこそ、ほんたうに、側にみてゐてもいぢらしいくらゐ夢中に。——平生、矢つ張、お父つあん子といはれるだけある。——近所の方でもみなさんさういつて下すつた位で……

市　藏。それぢやア尙更……

おみね。(うなづくやうに)ですから、いゝえ。——大きにそれは……さうかもそれは知れません。

間。

市　藏。(しみ〴〵)しかしさうやつて。——太アちやんまでさうやつて心配なすつたんですから。——御丹精です——皆さんのみんな御丹精です——小父さんの快くおなりになつたのに不思議はありません。

おみね。(同じくしみ〴〵)一時は、いゝえ、眞實にどうなるかと思ひました。——いまだからお話出來ますけど、とてもこれは快くならない——快くなつたにしても、これは、とても以前の體にはならない。——一生もうすたりものだ。——さう思つて、わたくし、自分にもう仕方がないと

斷念めました。(密と眼を拭く)

市　藏。いえ、御尤もで。——われ〳〵にしても、蔭ながら、飛んだことになつた。——いま、ここで、もしものことでもあつたらまツさきに組合のこつた。——どうしたつて無事ぢやアすまない。——折角、去年、あゝやつて小父さんが、あれだけ苦心して纏めて下すつたことが水の泡だ——われ〳〵、すこしでもあのとき、お手傳ひをしたゞけみんな吐胸をつきました。

おみね。はじめにあのおたづね下すつたのは、あれは。——たしかあれは一月の……？

市　藏。二十一日。——ちやうど初大師の日で。——實は、うちの奴ら二三人で、甥の奴が今年前厄だから西新井へ連れて行つてやらう——さういつて出かけようとしたところへ歩きの新公が來て、實は、今戸の親方が、四五日まへから急にこれ〳〵。——不意だから驚きました。——ついその二三日まへお目にかゝつたばかりなんですから……

おみね、いゝえ、お宅へだけでも早くお知らせしなければ。——さうしなければいけないと思ひましたんですけど。——さうは思つても、さア、何といづてお知らせしたらゝものか？——外の疾病と違ひます。——眞逆、急に、昨夜氣がへんになりました、とも……

市　藏。それは、もう……

おみね。……ほんたうに。——ほんたうに太吉と二人で途方にくれました。——たゞもう泪ばかり

さきへ立つて何をするしがくもつきません。——でも、六がよくしてくれるのと、御近所の方がみなさん御親切にいろ〳〵いつて下さるので、どうにか立つ瀬もつきました。——しツかりしなくつちやアいけない、お前がそんなことでどうする？——いくら自分で自分を叱つても。——叱つたそのときは、さうだ、自分がこれぢやア太吉が可哀想だ。——さう思つて、決してもう泣きますまい。——このさきどんなことがあつても太吉のために飽くまで平氣でゐよう。——ちやんとさうお肚を決めても、そばへ行つて病人に、こつちの顔が分らなかつたり、わけもなく病人がいきり立つて呶鳴り散したり。——いゝえ、呶鳴つてくれるのはまだいゝんで、床の上に、だまつてぼんやり、心細さうな顔をしてぢツと下を向いてゐる。——そんなとこをみると、どうして、まア、こんな因果な。——いゝえ、さうなるともう矢も楯もなく胸が一ぱいになりましてね。——今度といふ今度はじめて自分のいくぢのないが分りました。（密とまた眼をふく。——寂しくわらふ）

市　藏。不意ですから、いゝえ、御無理はありません。——これがデリ〳〵とだん〳〵わるくなつたとでもいふなら、また。——さうでないんですから……

おみね。いま思ひますと、しかし、去年の夏あたりから幾らかその氣があつた……やうな氣がいたします。——矢つ張、蔭で、デリ〳〵わるくなつてをつたか知れません。——それといふのが、その時分から、大へんお酒がわるくなりましてね。——醉ふとすぐつまらないことに目くじらを立てました。——お氣がつきになりませんでしたか？

市　藏。さア、さう被仰られると……（回想するやうに）

おみね。それにはめツきり御酒が弱くなりました。

市　藏。あゝ、それは。——それはたしかにありました。——もう飲けねえ、もう俺は飲めねえ。——ぢきにさうおいひなすつた。——何です、小父さん、そんないくぢのないことを、さういつてみんなが笑ふと、莫迦アいへ、酒なんてものはがぶ〳〵飲むからいゝつてものぢやねえ。——ホドだ。——ホドが肝心だ。——これまでそんなことをいはなかつた小父さんが。——小父さんのいひさうもない豪詞を、さういへば……

おみね。矢つ張、それは、外へ出ると自分に氣をつけたんでございますね。——一つには、しかし、度を外すと苦しくなる。——そんな風もみえました。——飲みたくつても體のはうでいふことをきかない。——だん〳〵つまりさうなつてまゐつたんだと思ひます。

市　藏。（つく〴〵といつた感じに）しかし怖いもんで……

おみね。（うなづくやうに）全く、それは。——はじめに疾病の出たときのことを思ふといまでも體がふるへます。——いつかもお話をしたと思ひますけど、いきなり太吉をつかまへて、何だ、手

めえなんか。——手めえなんかどだい親なしつ子ぢやアねえか……(二階へこなし)

市　藏。いゝえ、それは。——それは始めてうかゞひます。——そんなことを、小父さん……？

おみね。まだ、それ、お話し……？

市　藏。いゝえ、まだ。——まだうかゞひません。——うかゞひませんが、けど、平生あんなにも伏せてお置きになることを……？

おみね。いゝえ、ですから。——平生とまるで反對の……。

市　藏。で？

おみね。……いまゝでにしてもらつたのを誰のおかげと思ふんだ？——みんな俺のなさけぢやアねえか。——あのときもし俺が引取らなかつたら、手めえいまごろ香具師の手にわたるか乞食でもしてゐなくちやアならなかつたんだぞ。——その恩を忘れやアがつて。——さ、もう料簡がならねえ。——出て行け。——片時もゝう置くことは出來ねえからさつさと出て行け。——大したもう權幕……

市　藏。……

おみね。ちやうどお銚子の切れ目で臺所へ立つたところ。——何事がはじまつたかと思ひました。——眞逆疾病とは知りませんから一生懸命留めました。——留めたつて聞きません。——留めればば留めるほど嵩にかゝります……

市　藏。……

おみね。すぐそのまへまで機嫌よく。——いつものやうに機嫌よく太吉にからかひながらいたゞいてをつたのだけ、ほんたうにわたくし……

市　藏。で、太アちやんは……

おみね。太吉は何にも知りません。——何でそんなことをいはれるのかそれさへ分りません。——たゞもうおろ〳〵して……

市　藏。(いとほしむ感じに)ビツクリなすつたでせう、しかし。——急にそんな夢にも思はない……

おみね。けど、いくら氣がさうなつたからつて、平生あれほどにしてゐたものを。——あれほど大切にかけてゐたものを自分からさうやつて。——自分からさうむざ〳〵……

市　藏。……

おみね。おみね、決していふな、口が腐つてもいふな。——もし、太吉に、ちツとでもそんな素性を悟らせるやうな眞似をしたらたゞは措かねえ。——貰つた子供だつて、俺には、實子より可哀いんだ。——へんな智慧をつけて根性を僻ませるやうなことをしたらほんたうに承知しないから。

――始終口ぐせのやうにさういつてをつたのを、さういつてをつたその當人が自分からさう……

市　藏。……

おみね。人の心もちつてそんなにも脆いものかと思つたら。――さう思ひましたらつく〳〵なさけなくなりました。

市　藏。それは、しかし、あんまりさう深く。――あんまりさういふまい〳〵と思つてゐたのが反つて。――反つてそれが逆に……

おみね。あゝ、矢つ張……？

市　藏。……ぢやアないかと思ひますが。――で、このごろはどんな……？

おみね。このごろは、いゝえ、以前のもう通り。――ことによつたら、外に所在のないだけ、以前よりもつと子煩惱になつたか知れません。――すこしみえないと、太ア坊はどこへ行つた？　まだ學校から歸らないか？　遊びに出すのはいゝがあんまり遠つ走りをさせちやアいけない。――うるさくそんなことばかりいつて……

市　藏。と、その、愛想盡しの幕は……！

おみね。まるで自分にさういふ覺えがないらしいんで。――そんなことがあつたといふ顏もいたしません。

市　藏。……

おみね。一度、ですから、何といふかそれとなくいひ出してみました。――取合ひません。――そんなことがあるものか。――いかに料簡が狂つたつてそんな莫迦なことを。――戲談もいゝ加減にしろ、いふことゝいはないことがある。――すつかり機嫌をそこねました。

市　藏。……

おみね。これはいけない。――さう思つて話を外のことにごまかしましたけど……

市　藏。それでしかし太アちやんは？――太アちやんのはうは？

おみね。矢つ張これも子供で。――優しくされゝばまたされるで。――矢つ張、また、以前のやうに……

市　藏。何の、ぢやア、後腐れも……？

おみね。えゝ、いまのところぢやアべつに。――たゞ、いまお話したやうに、こゝへ來てわるく元氣がなくなつた。――變つたといへば、まア……

市　藏。……

おみね。呼ばれゝば、それは、いまでもすぐ側へ行きます。――けど、呼ばれなければいつまでも。――一人でいつまでもぼんやり。――それだけ氣に働きがなくなりました。――大きに、まだ、

悪いさかりのことを思つて氣味がわるいのか知れません。（わらふ）

市　藏。（遮るやうに）それは、しかし……

おみね。　えゝ？

市　藏。（やゝ寂しく）いゝえ、さうぢやアないと思ひます。

おみね。　さうぢやアない？

市　藏。　矢つ張それは小父さんの被仰つたことが祟つてると思ひます。

おみね。　……？

市　藏。　といふのが。――わたくしにその覺えがあります。

おみね。　……？

市　藏。　御存じか知れませんが、わたくしのほんたうの親父といふのはわたくしの三つのとき亡りました。

おみね。　……（うなづく）

市　藏。　そのあと、その三つになるわたくしをつれて、おふくろ、後添に入つたのがいまの親父のところ。――ですから、物心のつくまで、いまの親父をほんたうの親父とばかり思つてをりました。

おみね。　……（うなづく）

市　藏。　と、そのうち。――矢つ張十一か二のとき、これは近所によけいなことをいふ奴があつて、お前の親父はお前のほんたうの親父ぢやアない、お前はおふくろの連れつ子だ。――だからお前は可哀想だ。――さういはれたときの心もち。――ふいに水の底へでも引ずりこまれたやうに思ひました。

おみね。　……　……

市　藏。　さうなると、それまでの、自分に對する親父のいろ〳〵の仕打。――べつに邪慳にされたわけでもないんですが、どこか奥齒にものゝ引ツかゝつたやうな。――煮え切らない、ふんぎりのつかない工合がだん〳〵分つて來ました。――さうなると、さア、優しくされゝばされるでさびしく、小言をいはれゝばいはれるで心細く。――だん〳〵料簡のこづんで來るといふ奴が、わるくこのごろしねくねする、年も行かねえのに生意氣だ。――と、今度はさういはれることになりました……

おみね。（歎息するやうに）矢つ張、……さうなりますねえ……

市　藏。　しかし太アちやんの場合とそれとは違ひます。――まるで成立が違ひます。――無論、ですから、等並にはいへないものゝ、義理の仲といふことをいつてしまつた以上。――その以上は

もう……

おみね。（臆病に）それはもう取返しがつきません。

市　藏。いゝえ、ですから、さうなつたらいつそのこと、なんどりと、よく分るやうに、合點のよく行くやうにみんな打明けておしまひになつたら。――さうしておしまひになつたらと思ひます。

――そのはうがよかアないかと思ひます。

おみね。えゝ……

市　藏。打明けて、あなた、とツくりそれが太アちやんの胸に落ちたらこんなもう安心なことはありません。――無理から伏せて置くよりどんなにいゝか分りません。

おみね。それは、もう……

市　藏。（やゝ恥づるやうに）こんなことを。――こんなよけいなことを申すことはないんですけど、つい自分のうへに引くらべて、自分がもしあのときさうだつたら。――初手からはツきりいつてもらへたら、途中からあんなに親父を他人扱ひしずとよかつたらう。――延いておふくろによけいな肩身の狹いおもひをさせずとすんだらう。――さう思ふと、その……

おみね。……

市　藏。いまになると、それが、親父に入らざる遠慮をさせるもとになりました。――そのために、

親父、一目も二目もいまわたくしに。――（さびしく）此方にそんなつもりのないだけ氣の毒でたまりません……

おみね。……

市　藏。いや、これは。――とんだこれは愚痴を……（わらふ）

おみね。いゝえ。――有難うございました、いゝえ。――さううかゞつて、わたくし……

……格子あく。

おみね。あゝ歸りました……

おみね、すぐに立つ。――障子をあける。……

外の聲。六か？

おみね。いゝえ、市藏さん……

外の聲。仲町のか？

おみね。えゝ。――先刻からもう……

外の聲。さうか……

權七（六十一二）、あがつて來る。

權　七。いや、お待ち遠。――もつと早く歸るつもりだつたんだが……（しどく元氣に。――が、どこ

かに大患ひのあとのいた〳〵しさがみえる）

市　藏。いゝえ、お留守に出まして……

權　七。よくしかし來てくれた……

權七、さういひながら長火鉢のまへ（いまゝでおみねのすわつてゐた位置）にすわる。

市　藏。……御無沙汰いたしました。（改めてあいさつする）

權　七。いや、それは此方こそ。——また、心にかけて、たび〳〵見舞に。——いろ〳〵今度は心配かけてすまなかつた……

市　藏。いゝえ、そんなこと。——それよりだん〳〵と快いはうで結構です。

權　七。有難う。——おかげで思つたより早く快くなつた。——この鹽梅だと、月でも越したら、床上げをしてみんなのところへも顔が出せようと思つてゐる……

市　藏。しかし快いからつてあんまりさう輕舉をなすつたら……

權　七。いゝや、大丈夫だ。——もう大丈夫だ。——このごろは、一日隔きに、手めえであるいて醫者へ行くんだ。

市　藏。さうですつてね。——小母さんにいまうかゞひました……

權　七。內儀さんでも、六でも、それはまだ危えから止せといつたが、なアにいゝ、心配はねえ。

——無理に押切つて出てみたんだ。——さすがにはじめはふら〳〵しやアがつたが、すこし馴れたらぢきに何のこともなくなつた。——それから醫者へ行つてさういつた。——何とかいふかと思つたら、醫者の奴、それは好かつた、天氣でもいゝ日はそろ〳〵もうそのはうがいゝんだ。——こゝへ來るばかりでなく、これからは、日に一時間でも二時間でも時間を切つて毎日すこしづつあるいたはうがいゝ。——さう〳〵うちにばかりゐちやア反つていけねえ。——すつかり褒められたぢやアねえか……

おみね。（横から）先生もあなたの氣を知つてるから、いつても無駄と思つてわざとそれはさういつたんですよ。（わらふ）

權　七。莫迦アいへ。——假りにも醫者がそんなちよろツかなことをいふけえ。——これといふたしかなみとめがついたからさういつたんだ。——（市藏に）なア仲町の……

市　藏。（わらつて）それは、まア。——が、ぢやア、毎晩こゝ……？

權　七。さういふわけでもねえ。——出るのは晝間、醫者へ行かねえときだけだ。——それでも夜出るやうになつたのはこの三四日だ。——何としても好い陽氣になつたからなア。

市　藏。花がもうすつかり咲きました。

權　七。（うなづくやうに）咲いた。——もう、お前、公園の櫻なんか眞ツさかりだ。——篦棒に今

年は早えよ……

おみね。いつ行つたんです、そんなところへ？

權七。そんなとこつて何處よ？

おみね。いゝえ、公園へ？

權七。（やゝうしろめたい恰好に）いま行つて來たんだ。

おみね。そんな、まア、遠くまで。——何處かそこいらまでといつたぢやアありませんか？

權七。だから何處かそこいらまで行つて來たんだ。——醫者へ行くことを思へば。——醫者と公園と差渡しにしたら何ほどの違えもあるものか……

おみね。だつて、お前さん、夜ですよ。

權七。夜よ。——だから晝間のやうに人通りがなくつていゝんだ。

おみね。……

權七。そんなことをいつてる手間に何とかしたらいゝぢやアねえか？——折角仲町が來てくれたんぢやアねえか？

おみね。えゝ、さう思つたんですけれど……

權七。さう思つたら早くしねえな。——何でもいゝ、有合せで。——仲町は億劫なことは嫌ひなんだから……

おみね。えゝ……（立ちかける）

市藏。（いそいで）あゝ、小母さん、わたくしなら。——わたくしならそんな……

おみね。えゝ。

市藏。ほんたうに。——ほんたうにどうぞ……

權七。まアいゝぢやアねえか。お前。——折角來たんぢやアねえか。——久しぶりに來たのにロぐらゐ濡らして行くもんだ……

市藏。でも、今夜は、此方はそんなつもりぢやないんで。——たゞ、まア、その後どんな工合か？——だん〳〵、それは、快いと聞いて安心はしてゐましたが……

權七。そつちはそのつもりでも此方は飲らしてえんだ。——どうも飲りながらでねえと話のあがきがつかねえ。——永年の仕來りで此奴はどうにもならねえ。

市藏。でも、それは……？（權七の顏をみる）

權七。えゝ？

市藏。いゝんですか、そんな……？

權七。何を？

市藏。いゝえ、そんなことをして體に……？

權七。體に……？（急にさびしくわらふ）——いゝえ、俺は飲らねえ。——俺は飲らねえんだ。——

俺だつて、お前、いのちは惜しいからそんなふざけたことはしねえ……

市藏。いゝえ、そんなら好いんですけど。——さうでもない、また……

權七。それア大丈夫だ。——いくら好きでも今度は懲りた。——第一飲みたくねえ。——まるで飲りたくねえ……

市藏。（半ば疑ふやうに）ほんたうですか？

權七。ほんたうだ。——嘘ぢやアねえ。——おそらくこのまんま飲めなくなるんぢやアねえかと思ふ……

市藏。さうでせうか？

權七。必と、何だぜ、口へ持つてつたつてもう受けつけねえぜ。

市藏。……

權七。よくしたもんだ。——醫者がやい〳〵いはなくても、自然さう、そつちのはうから工合しきがついて來るんだ。（わらふ。——おみねのはうをみて）何をしてゐるんだな？——さつさと支度しねえかな？

おみね。すぐにしますけど。——でも、あんまり何にもないから。——お蕎麥でもさういひませうか？

權七。蕎麥？——（市藏に）どうだ、仲町？

市藏。いゝえ、もう。——（おみねに）結構です。——結構です、もう……

おみね。そんな遠慮なすつちやア……

市藏。いゝえ、遠慮ぢやアありません。——こゝへ來てそんな遠慮なんぞ。——ほしければ此方からねだります。

おみね。でも……

市藏。いゝえ、ほんたうに。——飯を喰つてすぐ出て來たんで。——とても、まだ……

おみね。だつて一つぐらゐ……

市藏。いゝえ。おあづけにします。——お預けにして置きます……

權七。（おみねに）いゝやな、そんなら。——うまくもねえものをそんなにいふこたアねえ。——六みたやうに意地の汚えんぢやアねえ。——あるもので負けて置いてもらへ……

おみね。さうですか？——ぢやア、まア、ほんたうの……

市藏。それも、いゝえ、わたくしだけなら。——わたくしだけでしたら、小母さん、ほんたうに……

おみね。えゝ……

おみね。臺所へ立つ。

權七。手めえの勝手ばかりいつてゝそつちのことを聞かなかつた。——でも、みんな、うちゞやア變りはねえか？

市藏。へえ、有難う。——おかげで、まア、丈夫なことはみんな……

權七。さうか、それア結構だ。——何よりだ……

市藏。へえ。

權七。親父はどうしてゐる？——相變らずか？

市藏。へえ、まア……相變らずで……（わらふ）

權七。どうしてあゝぼやゝしてしまつたもんか？——俺より、まだ、三つも下なんだぜ。

市藏。えゝ。

權七。あれア何だね、若いとき下直にあんまり體をつかひ過ぎたむくいだかね。——さうでなくつて、あんなに。——いまツから、あゝ……

市藏。……

權七。しかし好い男だつたからな。——それに素人には惜しいやうなノドをもつてゐた。——あれで身が持てたら不思議だつたか知れねえ。

市藏。……

權七。人のことはいへねえ。——手めえにげんに罰があたツたんだ。——女と酒の違ひだけだ。（わらふ）

市藏。……

權七。いつだかおふくろの眼が惡かつたつていふぢやアねえか？——どうした？——癒つたか？

市藏。いゝえ、あれは、ほんのものもらひをこじらしたゞけなんで。——大したことはなかつたんで。——すぐもう癒りました。

權七。それア好かつた。——眼は大切だから……

市藏。えゝ、それに眼の性のあんまり好くないはうですから……

權七。それア仕方がねえ。——若いときあれだけ泣き暮した眼だ……

市藏。（やゝさびしく）えゝ。

權七。で、どうだ、稼業のはうは？

市藏。えゝ、まア、ぼつ〳〵……

權七。ぼつ〳〵でもあれば結構だ。——世間はどこも酷いつてな？

市藏。お話になりません。

權七。この間、六に、いろ〳〵聞いて呆れ返つたよ。——どうしてさうだらう？

市藏。みんな、それ〴〵に、色んなことをいひますが……

權七。（やゝ顏を曇らせて）そんな風ぢやア何だらう？——從つて組合のはうもよく行かねえだらう？

市藏。えゝ、まア、それは。——それについて、いろ〳〵、小父さんの耳に入れたいこともあればつ入れたくないこともありますが。——それは、まア、もつとさきのことにします。——いまは、まだ……

權七。さうしてくれ。——そのはうがいゝ——まだ、いま、詰めてあんまりものを考へるなと醫者にもいはれてゐるんだ。

市藏。えゝ。

權七。聞けば聞き腹。——矢つ張、さうすれば、えうもねえ修羅をまたもやさねえとも限らねえ。——そんなことをしたらつまらねえ。

市藏。えゝ、ですから。——たゞしかしこれだけはいつて置きます……

權七。何を？

市藏。いゝえ、何があつてもみんな小競合。——去年のやうな騷ぎには大丈夫なりつこありません。——ですから、まア、それだけは御安心ねがひます。

權七。お前がゐればそんなヘマはやりツこねえ。——だから俺は安心してゐる……

市藏。いゝえ、さう行けばいゝんですが……

（おみね、二本ほど銚子を入れ、箸だの猪口だのと一しよに臺所からもつて來る。）

おみね。（權七に）一寸、そこで、海苔を燒いて下さいません？

權七。海苔？——うん、よし……（すぐ長火鉢の抽斗から出す）

——その間に、權七、海苔を燒く。（おみね、銚子を銅壺に入れる。幕あきの太吉の膳を見恰好よく鹽梅して箸や猪口をそれにのせる。）

おみね。御覽の通りほんたうに何にもないんですよ。——たゞ、もう、ほんの……（膳をまへに出す）

市藏。いゝえ、とんだ。——夜分上つて……

權七。お前が飲むんぢやアねえ。——さう思つちやアいけねえ。

市藏。えゝ？（權七の顏をみる）

權七。お前のためでなく俺のため。——俺のために飲んでくれると思やアそれでいゝんだ。——さう思やア腹は立たねえ。（わらふ。——燒いた海苔をおみねにわたす）

市藏。……？

權七。分らねえか？――俺のまへで、何でもいゝ、飲んでみせてくれりやアそれでいゝんだ。――さうすれば俺の氣がすむんだ……

市藏。（わらって）しかし……

おみね。（銚子を銅壺から出して）お燗がつきました。――さア……

市藏。へえ、有難う……（猪口を取上げる。――おみねのつぐのをそのまゝ）しかし、それは……

權七。ときく、いゝえ、寂しくなるんだ。――どうにも手めえに恰好がつかなくなるんだ。――さういふとき、このごろ、六を呼びにやつちやア飲ませるんだ。

市藏。……

權七。が、彼奴、もとく飲ける口でねえんだ。――猪口に一つか二つですぐ眞つ赤になる。――それでもいゝんだ。――それでも、此奴、氣はすむんだ……

市藏。……

權七。だから、何がなくつても、飲んでさへくれりやア有難えんだ。――さうすりやアお前、とんだ功德になるんだ……

市藏。（わらって）戯談を……

權七。いゝえ、全く。――全くだ……

市藏。……

權七。だから、みねえ、俺が飲まなくつても酒はある。――始終取つとかせるんだ。

市藏。……

權七。だから、まア、ゆつくり飲つてくんねえ。

……このうち、市藏。おみねにつがれて猪口をかさねる。

權七。（急に）太ア坊はどうした？――まだ夜學から歸らねえか？

おみね。いゝえ、もう、疾うに歸りました。

權七。どこにゐる？

おみね。二階にゐます。

權七。一人でか？

おみね。えゝ。

權七。呼びねえ。――こゝへ呼びねえ……

おみね。（やゝ力なく）えゝ。

權七。……買つて來たんだ。――かういふものを買つて來たんだ。（ふところから思ひ出したやうに

買つて來た小さな玩具をつかみ出す）

おみね。何です？

權　七。獨樂だ。（まはしてみせる）

おみね。まア……

ともゞ市藏も首をのばしてみる……

權　七。器用に出來てるぢやアねえか。――大道で賣つてゐたんだぜ……

おみね。ほんたうに……

權　七。呼べよ。――早く呼べよ……

おみね、立つて奥へ行く。

市　藏。大道の玩具だからつてこのごろは莫迦に出來なくなりました。

權　七。出來なくなつたとも。――なまじつかの店でうるものよりよつぽど此方のはうが器用になつてる……

市　藏。われ〳〵の子供の時分には、とんだり跳ねたりか、山吹鐵砲ぐらゐが關の山でしたが……

權　七。さうだ、山吹鐵砲つてものがあつたな？

市　藏。えゝ。

權　七。いまでもあるかしら、あんなもの？

市　藏。この間の彼岸に門跡さまでみかけましたが……

權　七。矢つ張、ぢやア、あることはあるんだな？

市　藏。可笑しなもんで、それをみたら、ふいと十二三の時分の氣になりました。（わらふ）

權　七。（うなづいて）うん、あるもんだ、さういふこと。――俺のやうな年になつても餓鬼の時分だけはときゞまだ戀しくなる。――（手を伸して銚子をとる）さア、一つ酌をしよう。

市　藏。いゝえ、勝手にいたゞきます。

權　七。まア、いゝぢやアねえか……

市　藏。すみません、これは……（猪口を出す）

權七、酌をする。――おみね、太吉をつれて來る。

權　七。（いへば七八つの子供の機嫌をとるやうに）太ア坊、來ねえ。――こつちへ來ねえ。――いゝもの買つて來てやつたぜ……

太　吉。……（權七のそばへ行く）

權　七。獨樂だ。――かうして斯うやればすぐ廻る。――そら……（まはしてみせる）

太　吉。……

權　七。廻してそれからかうやればいろ〳〵色が變る。――どうだ、そら？――もう一つ。――どうだ、今度……？（いろ〳〵してみせる）

太　吉。……

權　七。どうだ、面白えだらう？――やつてみな。――自分で、さア、やつてみな……

太吉、いはれるまゝそこにすわつて獨樂をまはす。――無言のその寂しい擧止。――おみね、市藏、それとなくぢツとそのさまを（といふことは、同時に、權七のさうしたさまを）みまもる……

間。

格子あく。

外の聲。……（何かいふがはツきり聞えない）

おみね。はい……（ふり返る）

外の聲。仲町の小柴から出ましたが……（やゝはツきり聞える）

市　藏。わたくしのやうです……（持つた猪口を下に置いてすぐに立つ。――障子をあけて）何だ、お前？――何か用か……？

外の聲。……（何かいふが聞えない）

市　藏。何だつて？――一寸待ちねえ……（そのまゝ障子のそとに出る）

やゝ長き間。（……このうち、おみね、新しい銚子を銅壺に入れる）

……使の男、あいさつして歸つて行く。――市藏、膳のまへにかへつて來る。

おみね。御用ですの、お宅？

市　藏。えゝ、一寸……

權　七。何か……？

市　藏。いゝえ、出たあとへ人が來たもんで。――都合で、歸りに、一寸そこへよれとおふくろからいつてよこしたんで……

權　七。どこだ？

市　藏。いゝえ、この近所なんで。――山の宿なんで……

權　七。ほんとの、ぢやア、歸りみちだ。

市　藏。えゝ――古い親父の時分からの、いゝえ、仕事さきなんですが、わるく堅い、口やかましい家なんで、あんまり平生顏を出さないんですが。――（おみねに）何時になりませう、もう……？

おみね。（時計を見て）九時……四十五分。――うちのは少しすゝんでるかも知れません。

市　藏。それにしても、もう。――大へんこれは遲くまで……（急に冷えた猪口を干して下に置く）一寸出て飛んだ御馳走になりました。（そのまゝ立ちかける）

權　七。（狼狽て〻）まだい〻ぢやアねえか――まだ、お前……

市　藏。いえ、そこへよるとすると。――堅氣の家へあんまり遲く行くのは、此奴……

權　七。うん、それはさうだ……

おみね。ぢやア、まア、もう一つ熱いのを上つて……（銅壺から銚子を出す）

市　藏。い〻え。――い〻え、もう……

おみね。まア、折角つけたんですから、――一つだけ。――一つだけでも……

市　藏。でも……

權　七。お前が飲まなくつて誰が飲むんだ？――お前が飲まなければ無駄になるもんぢやアねえか？

市　藏。それは、まア……

權　七。一杯でい〻。――一杯でい〻から手だけつけて行きねえ。――あとは糠味噌へ入れたつてい〻から……

市　藏。さうですか？――ぢやア、まア、一つだけ……（もう一度猪口をとり上げる）

おみね。すこし今度のはつきすぎたか知れません。

おみね、酌をする。――市藏、すぐまたそれを飲んで、今度は猪口を膳のうへにふせる。

市　藏。では、これで……

おみね。さうですか？――何にもこれはお構ひいたしませんで。――反つて御迷惑でございました。

市　藏。い〻え、とんだ御厄介をかけまして。――（權七に）小父さん、ぢやアお暇いたします。――そのうちまた――近いうちにまたうかゞひます。

權　七。あ〻さうしてくれ。――みんなにもいつてときゞ遊びに來てもらつてくれ。――誰も來ないと心細くつていけねえ。

市　藏。え〻、みんなによくさういひます。みんなは、まだ、小父さんがこれほどになつてゐようとは夢にも思つてゐません。

權　七。もう大丈夫だ。――もと〻もうちツとも違はねえ。――强情も相變らずだ。――よくさういつてくんねえ。

市　藏。え〻さういつてやります。――すつかり話したら必とみんな呆れます。（わらふ――太吉に）ぢやア、太アちやん、左樣なら……

おみね。太アちやん、小柴の兄さんお歸りだよ。

太吉、ぼんやり立つてゐる。

權　七。（何のこともなく市藏に）どうしたんだか、坊主、こ〻んところ一寸元氣がねえんだ……

ふと、おみね、市藏のはうをみる。

間。

市藏。ぢやア御免下さい……

市藏、出て行く。――權七、おみね、太吉、上り口まで送つて出る。

おみね。（うしろから）お歸りになりましたらどうぞみなさんによろしく。……

權七。（ともく）うん、さうだ。――親父やおふくろに俺がよくさういつたといつてくれ。――來月になつたらどこへ行くより第一番にお前んところに行くから……

……市藏、それく〳〵それにこたへるがはツきり聞えない。

間。

……格子しまる。――權七をさきに、おみね、太吉、障子をしめてそれく〳〵もとの位置にかへりかける。

權七。（くど〳〵した感じに。――半ば自分にいふやうに）しかしい〻男だ。――音無しい、肚のしつかりしたい〻男だ……

おみね。え〻？

權七。い〻え、市藏よ。あんな放埒な親父でも仕合がよければあ〻いふい〻せがれをもつことが

出來るんだ……（すわる）

おみね。（やゝ寂しく）え〻……（ともく）太吉とすわる）

間。

……權七、夕刊を擴げてよみはじめる。――太吉、獨樂をまはす。――おみね、膳のうへを片づける。

間。

……うす曇つた戸外にどこの花ともなくしづかにふかれて來る。（幕）

（昭和二年三月）

（ナンメンジンレンの國古ごの）

おその

□

おその

六三

お梶

清兵衛

長庵

七郎助

その他

□

江戸深川

□

……お梶、屏風をあけて床の上のおそのに藥をのませてゐる。

おその。（心から感謝するやうに）有難うございました……

お梶。飲めたかい？

おその。えゝ。

お梶。それはよかつた、藥さへとほれば安心だ……

おその。えゝ……（やゝ苦しさうにうなづく）

お梶。何か食べてみようとお思ひでないか？

おその。有難うございますけど。——胸がまだ痞へてをりますから……

お梶。何か、しかし、無理にでもたべないと。——何にも、まだ、昨夜からたべてゐないんだから……

おその。すみません。——御心配ばかりかけまして……

お梶。何だね、そんな他人がましい……

おその。（力なく）いゝえ、お内儀さん、ほんたうに、わたくし、よくしていたゞけば頂くほどお内儀さんにお氣の毒で……

お梶。それがいけないんだよ。——そんなことをいふのがそれがよけい病ひに障るんだよ。——そんなことをいふ手間に、お前、精出して藥も飲み、たべるものも食べて、さうして一日も早く座敷へ出られるやうになつてくれる。——さうしてくれるのがわたしには一番うれしいんだよ。

おその。えゝ……

お梶。といふのも、お前といふ人は、好きでわたしがうちへ連れて來た人。——あんまり兄さん

の仕方が憎いから、善六さんに話し、横から出て無理にわたしのところへ抱へた人。――だから、わたしにすれば、どうしたつてこの土地で、吉原にゐたときよりもつとお前を立派に賣出させなければ。――さうしなければわたしの意地が立たない。

おその。それは、いゝえ、それはよく分つてをります。

お　梶。（やゝ寂しく）それは、まア、あゝいふ邪慳な兄さんをもつたことや、お屋敷の首尾をわるくした六三さん……

おその。……（おもはず顔を上げる）

お　梶。……とかいふ方のこのさきのことや。――それからそれいろ〳〵思ひまはしたら、でなくつても狭い女ごゝろに。――それには、わたしにいはせれば、苦勞はしてもそれだけにまだ年を、――きな〳〵思ふなといふのはさういふわたしのはうが無理かも知れないけれど……

おその。……（さしうつむく）

お　梶。けど、これだけはいつて置くよ。――わたしの口からさういふのは可笑しいけど、根がお肚の綺麗なうちの人はもと〳〵この稼業が好きでないんで、時節さへ來ればそれこそ明日にでもこの稼業を止めたいと始終それはわたしにさういつてゐる。――以前中裏にゐたのをいまこの横町に引つ込んだのも、大ぜいゐた子供たちをみんな外へ住替へさせたのも、つまりはみんなその

心からしたことで……

おその。……

お　梶。といつたところで、いくらさう此方でばかり思つたところで、それもみんなさだまる約束だから、仕合がうすければ一生さう行かないかも知れない。――一生このまんまで終らなければならないか。知れない。――でもいゝ。――でも構はない。――一生わたしたちはそのつもりで。――一生そのつもりを大切にもつて暮して行けばいゝんだから……

おその。……

お　梶。さういふ心もちなんだよ、わたしたちは。――賣出させるの、伸立せるのといつても、決してだからわたしたちそれを店のために、自分たちのためにさういふんぢやアない。――無理からさういつてお前を稼がさうといふんぢやアない。――はじめて逢つたときから、わたしもお前を親身の妹のやうに思へば、うちの人もまた、どういふものか俺はおそのが不憫でならない。――あゝいふやさしい氣立の子がどうしてさう苦勞をするだらう。――お前がうちへ來るとからわたしにさういつてゐる……

おその。……

お　梶。それだけに、わたしたち、たゞもうお前の身の末があんじられてね……

おその。……

お　梶。このうへの不仕合に、このさきまたどういふ辛いことが出て來るか知れない。どんな憂苦勞がわいて來るか分らない。――でも、必ずそれを氣に病んでめつたなことはしないでおくれね。――すこしでも思案にあまることがあつたら、かくさず打明けておくれね。――どんなことが起らうとわたしたちがついてゐれば決してわるいやうにはしないから……

おその。……

お　梶。必ずはづかしいことや悲しいことは聞せないでおくれよ。――たのむから。――たのむからどうぞ聞かせないでおくれ。――えゝ？――いゝかい……？

おその。有、有難うございます……（泪をふく）

お　梶。……（さそはれてともに密と泪をふく）

おその。親方さんやお内儀さんがさうまでやさしくして下さるにつけても……

お　梶。えゝ？

おその。いゝえ、どうしてあゝ兄さんは……（再び泪をふく）

お　梶。それがいけない。――そんなよけいなことを思ふからいけない。――それもゝうわたしが引うけて話をするといつたからは何にも心配することはない。――何でも氣を大きく。――氣を

大きくもたなければいけない……

おその。えゝ――えゝ……

お　梶。（わらつて）さういふわたしも惡い。――そばでわたしがつまらないことをいろ〳〵いふもんだから。――堪忍しておくれ……

おその。いゝえ、そんな……

お　梶。さ、すこしまた横におなり。――さうおし……

おその。えゝ、……

お　梶。いつまで起きてゐて風にあたるといけない。――大分、また、先刻方から冷えて來たから……

おその。えゝ。――では、すこし、やすませていたゞきます……

お　梶。さうおし。――ゆつくりお休み。――さ、わたしが懸けてあげる……

おその。いゝえ、おそれ入ります……

お　梶。いゝからおやすみ……

おその、横になる。――お梶、夜着をかけたりする……

間。――お梶、屏風を引廻して去る。

……長庵、七郎助と一しよに門に來る。

長　庵。御免。――御免……（……返事なし）御免。――（そばで七郎助のぶつくさいふのを押へて一ト際聲を張上げる）お留守かな？　どなたもお留守かな？

「はい、どなた？」といひながら、お梶、おくから出て來る。

お　梶。（それをみて顏を曇らす。――が、あいそよく）まア、長庵さんに七郎助さん。――よくおいで。――さ、さアどうぞ……

長　庵。（七郎助をふり返って）お許しが出た。――さアどうぞ……

七郎助。まアお手前から……

長　庵。いや、まア……

七郎助。まア……

長　庵。では年やくに愚老から。――はい、御免。――御免を……

長庵をさきに七郎助、くど〳〵いひながら座敷にとほる。――二人とも酔つてゐる。

長　庵。いやお内儀、この中は……

お　梶。まアお二人ともいゝ御機嫌で。――今日はどちらへ？

長　庵。いや、こちらへ。――どちらへでもなく此方へな……

お　梶。（やゝ皮肉に）それは、また……

長　庵。といふのもおそのゝ身の代。――お内儀、あの後金のしらちはどうつけて下さる？

お　梶。だから、それは、あのときもいつたやうにおそのと兄妹の縁さへ切れば。――さうさへして下されればいつでもそれは……

長　庵。しかし、お内儀……

お　梶。（押へて）が、それにしても肝心のおそのが、昨日から氣合をわるくしてやすんでゐます。（屏風のはうへこなし）――そのことでしたら、長庵さん、またのことにして下さいまし。

長　庵。と、あの妹は？――一寸、では、容體を……（立ちかける）

お　梶。（とめて）あゝ、それは。――折角いま眠つたところ。――いま起しちや可哀さうですから……

長　庵。それもさうか？（うなづいてすわる。――七郎助と顏をみ合せる。――暗默のうちにこなし）したがお内儀……

お　梶。……？

長　庵。もし愚老が。――假りにもし愚老がその話を承引かずとしたら。――いやといつたらそのときはどうなさる？

お梶。いやといつたら？

長庵。（うなづいて）おそのと兄妹の縁を切り申さぬ。——未來永々切り申さぬ。——さうしたときはどうなさるな？

お梶。それは、また？——何で、また、そんなことを〻

長庵。何でゞもよい。——そのあかつきはどうなさる？

お梶。それはそのときは……

長庵。そのときは？

お梶。それまでのこと〻思つていたゞきませうよ。（横をむく）

長庵。しめた！（手をうつ）

お梶。え〻？

長庵。（七郎助に）話は出來た……

七郎助。おツと……（ふところから財布を出して長庵のまへに投げだす）

長庵、いそいでそのなか〻ら小判で二十兩出す……

長庵。お内儀、いつぞやの手附二十兩。——さ、耳をそろへてお返し申す……

お梶。（や〻狼狽て〻）長庵さん……

長庵。金を返せば、おそのはやつぱり愚老の妹。——煮てくはうと燒いて食はうと。……（七郎助に）あとはそつちの腕次第だ……

七郎助。これでやつと落着いた……

急に、おその、屏風のかげから轉び出る。

おその。後生です。——後生でございます、お内儀さん……

お梶。あ〻、お前……（掴き抱く）

おその。いやです。——わたしは行きません。——死んでもわたしは七郎助さんのところへは行きません……（泣く）

お梶。わたしのうつかりしたばかりに。——うつかり多寡をく〻つたばかりに。——堪忍しておくれ。——堪忍しておくれ……

おその。い〻え、そんな。——みんな兄さんです。——み、みんな兄さんのするわざです。——わたしは。——わたしは、もう……（泣き入る）

お梶。いけない。——氣をしづかに。——氣をしづかにおちつけて……

おその。え〻。——え〻……

お梶。心配おしでない。——惡いやうにはしない。——決して惡いやうにはしないから……

おその。えゝ。――えゝ……

お　梶。大丈夫。――大丈夫だから……

長庵、七郎助、そのさまを冷かにみまもる。

長　庵。いくら泣いてもわめいても、だ。――もういけねえ。――もう間に合はねえ。

七郎助。そろ〳〵、ぢやア、出かけようか。――酒がさめたら里ごゝろがついた。（煙草入をしまひかける）

長　庵。よからう。――話がつきやア片時もこんなところにゐる義理はねえ。――行かう。――さ、おその、行かう……（立上つておそのを引立てる）

お　梶。（遮る）長庵さん……

長　庵。（空つとぼけて）えゝ？

お　梶。いかに何でも、お前。――それは。――あんまり、それは……

長　庵。あんまり、それは？――何が？

お　梶。何がつて、お前、寢てゐるこんな病人を……

長　庵。なアに大したことはねえ、陽氣あたりだ。――名醫の見立に間違ひはねえ。――（おそのに）行かう。――さ、行かう。――（じやけんに）素直に、えゝ、來やがらねえか……

おその。（消え入るやうに）お内儀さん。――お内儀さん……

お　梶。あいよ。あいよ……

……お梶のやるまいと支へるのを、七郎助、そばからそれをさまたげる。――その間に、長庵、無理からおそのを上り口までつれて出る。――おその、かなはぬながら行くまいとする……

間。

清兵衞、つと外から入つて來る。――揉合ふなかに割つて入る。――とゞ、長庵と七郎助を撥退（のけ）おそのをうしろにかばつて立つ。

長　庵。手めえは清兵衞……

七郎助。何を、うぬ、こちとらの邪魔をしやアがる……

清兵衞。話は外で聞いた。――何にもいはずといゝ……

長　庵。といふなら。――それなら俺たちのすることにいなやはあるめえが……

清兵衞。いなやはねえ。――いなやなんぞあるものか……（わらふ）

長　庵。ぢやア、なぜおそのを渡さねえんだ？――音無しくなぜ渡さねえんだ？

清兵衞。いなやはねえが不足がある。

長　庵。何だと？

清兵衛。（お梶に）おい、その金をこつちによこしねえ。

お梶、そこにそのまゝになつてゐる小判をとつてわたす。

清兵衛。（念を押すやうに）長庵さん、これア小判だね？

長　庵。念にはおよばねえ。

清兵衛。いつぞや女房が手附に渡したのは櫻銀だ。——矢つ張その一分銀で返してもらへめえか。

長　庵。戯談いやアがれ。——いつまでそれをもつてる間抜があるものか。——ふざけるのもいゝ加減にしろ。

七郎助。それとも小判は通用しねえといふお觸でも出たのかね？

清兵衛。出たからいふのだ。

長　庵。
七郎助。何だと？

清兵衛。裏にこの三星の極印。——昨日さるお屋敷でぬすまれたといふ小判もたしか……

七郎助。……（おどろく）

清兵衛。と、まア、いつてしまつたら曲がねえ。——さ、これはそつちへ大切にしまつて置きなせえ。（わらつて財布ぐるみ七郎助のまへに投出す）

七郎助、いそいでそれをふところに入れる。

長　庵。（うさんな顏で）ぢやアその金は？

七郎助。箆棒め、そんなあやしい金ぢやアねえ。

長　庵。そんなら遠慮するこたアねえ。——さつさとさア手附を返してしまひねえ……

七郎助。でも、折角さきでさういふもんだ。——器用に一歩銀の耳をそろへてもよし、さうでなければ手附を返さず、福島屋清兵衛は惡足のある女を承知で證文したと、とてものことに觸れてあるく。——さうすれば、このさき、人中へ出て二度と高慢な口はきけねえ。

長　庵。なるほど、それもいゝだらう。

清兵衛。お梶、おそのゝ身もとはお前が洗つたはずだ。——そんなことのある女か？

お　梶。いゝえ、この子に限つて。——それは何かの間違ひです。——そんなことのあるわけがありません。

長　庵。ない？——必とないか？——お内儀、必とないか？

お　梶。ないといつたらありません。

長　庵。これでもないか？

長庵、いきなりおそのゝ腕をとつて引据ゑる。——袖をまくつて入ぼくろをみせる。

おその

長　庵。六三命……

清兵衞。
お　梶。……

長　庵。（にく〳〵しく）こんな證據があつてもこれでもないか？

清兵衞。
お　梶。……

長　庵。ざまアみやがれ。

長庵、七郎助をかへりみてわらふ。――清兵衞、いきなり持つた煙管の火皿をおそのゝ腕に押しつける。――おその、苦しむ……

お　梶。（おどろく）まアお前さん……

清兵衞。うるせえ、しづかにしろ。

お　梶。……

清兵衞。長庵さん、七郎助さん、これで文句はあるめえが？

長　庵。うん、さすがは福島屋、いゝ度胸だ……

清兵衞。と決つたら、こゝは上り端だ、奥へ來なせえ。（自分から立つ）

長　庵。（やゝ皮肉に）此奴は汐さきが變つて來た……

清兵衞。お梶、酒の支度をしねえ。

お　梶。だつて、お前さん……

清兵衞。いゝからしろつていふんだ。

清兵衞をさきに、長庵、七郎助やゝ顰に發かれたかたちに奥へ行く。――お梶、おその に心を殘してあとに從ふ。

間。

……六三、窓のそとに來る。

六　三。おその、おその……

おその。……（顔を上げる）

六　三。こゝだ、こゝだ……

おその。まア六三さん。――お前、どうして……？（窓のそばによる）

二人、手を取合はないばかりにそのまゝ、しばらく泪にくれる。

六　三。……さうして、お前は、いよ〳〵こゝのうちへ證文することに？

おその。いゝえ、それが、いまになつてまた兄さんが……

六　三。得心しないのか、長庵が？

おその。（力なく）えゝ……

六　三。矢つ張、それも、七郎助の……

おその。そ、さうなんです。（泪を拭く）――わたしは、もう、六三さん。――わたしはもうあきらめました。

六　三。おその、それは何をいふのだ？（やゝ鋭く）

おその。いゝえ、とてもこの世では添へない二人。――わたしといふものゝゐた分にはいつまであなたもお屋敷へ御歸參は出來ません。――大切な色紙の行方を知れなくしたのもわたしなら、そんなしがないおすがたにしたのもわたし。――わたしとさへ縁が切れゝばせめて親御へのお詫だけでもかなふだらうと思ひます……

六　三。（冷かに）お前とわかれて何の榮耀。――この上まだどんな苦勞でもわたしはいとひはしないゝ……

おその。といふのは、いゝえ、とも〳〵わたしもいつまでさう苦勞をするより、いつそのこと七郎助さんの……

六　三。おその……

おその。いゝえ、一生わたしは、らくに暮したくなりました。

六　三。……（ぢつとおそのゝ顏をみる）

おその。六三さん、さういはれるのがくやしければ、さ、斬つて下さい。――斬るとも突くともして下さい……

六　三。……

おその。浪人するとさうも未練に……

六　三。……

おその。女でも、わたしなんぞ、いざとなればこの通り……（腕をまくつてみせる）

六　三。……（驚く。――丸腰なのをくやむこなし。――急に窓のそばを離れる）

おその。六三さん……

六　三。えゝ、待つてをれ……

六三、いそいで去る。

おその。堪忍して下さい。――堪忍して下さい。――この言譯は未來で必と……（そのまゝ泣きくづれる）

……長庵、出て來る。

おその

長　庵。出來した、出來した。――それでこそ俺の妹だ。――長庵の妹だ……（機嫌よくさういひながらおそのゝそばにすわる）

おその。それぢやア、お前……

長　庵。障子のかげからちやんとみてゐた。――よく六三を突出した。――よく、手めえ、その氣になつた。――褒めてやるぞ、褒めてやるぞ……

おその。いゝえ、あれにはいろ〳〵……

長　庵。わけでもあるといふのか？

おその。……（かすかにうなづく）

長　庵。（わらつて）わけもへちまも入るものか。六三とわかれゝば、それでいゝんだ。あとは七郎助の御新造だ……

おその。あゝそれだけは……

長　庵。まだそんなことをいつてゐやアがる。――いけ強情な。（といひかけて）うんといへ、うんといへ……

おその。……

長　庵。惡いことはいはねえからうんといへ。――手めえさへうんといへば、手めへばかりぢやアねえ、俺まで一生左團扇でくらせるんだ。――たのむ。――たのむから合點してくれ……

おその。……（かぶりをふる）

長　庵。かぶりをふるのは嫌か？――そんなら此方にもしようがある……（ふとこから袱紗づゝみを出す）これをみろ。

おその。……（顏を上げる）

長　庵。これこそ六三が草を分けてさがしてゐる小倉の色紙だ。

おその。えゝ？（おどろく）

長　庵。これがほしければうんといへ。――いやだといへば百兩が千兩積んでもわたすこつちやアねえ。

おその、急にそれへとりつく。

長　庵。えゝ、何をしやアがる……（引放す）

おその。どうぞ。――それさへあれば六三さんの――六三さんの御歸參が。――おねがひです。――おねがひです。――おそのゝ一生のおねがひです……（身を揉んで哀訴する）

長　庵。（冷かに）知らねえよ。

おその。そんなことといはないで。——そんな邪慳なことといはないで……

長　庵。どつちが邪慳だ？——いふことは聽かねえ、色紙はよこせ。——さういふ手めえのはうがよつぽど邪慳だ。——そんな勝手な奴があるものか……

おその。いゝえ、わたしの惡いところはあやまります。——いくらでも惡いところはあやまりますから……

長　庵。うるせえな。

おその。兄さん。——ねえ、兄さん、——ねえ、兄さん、後生ですから……（再びとりつく）

長　庵。（急に）えゝ、いゝ加減にしやアがれ……（用捨なくふり拂ふ）

おその、カツとしたかたちにいきなり長庵にむしやぶりつく。——長庵、不意をうたれてやゝ怯む。——おその、その隙に色紙を手もとにとらうとする。長庵、さうさせまいとする。爭ふはづみに、色紙、眞ん中より裂ける。——二人とも仰天する……

長　庵。（捨鉢に）ざまアみろ、これで六三は一生うもれ木だ……（手の餘つた半分をずた〳〵にやぶく）

おその、長庵の差添を拔くより早く長庵に斬りつける。

長　庵。何の眞似をしやアがる……（押へる）

おその、ふり切つてまた夢中に斬りつける。長庵、必死にその刄の下を掻いくゞる。——とゞ一ト

太刀二タ太刀斬られる。逃げ損じてあへなく絶命する……

間。

おその。兄さん、お前ばかりは殺さない、わたしもあとからすぐに行きます……（泣く）

……「おその、おその」と奥で清兵衞の呼ぶのが聞える。——おその狼狽てゝあり合す蒲團を長庵の上にかける。

清兵衞、出て來る。

清兵衞。何だ、おその、そこにゐたのか？——兄貴はどうした、歸つたか？

おその。は、はい、いま。——こゝにいま醉つて寢てをります。

清兵衞。そつと、ぢやア、そのまんま寢かして置け。

おその。は、はい……

清兵衞。ありやうは尾花屋から是非といつてお前をかけて來た。體がわるいと斷つたら、一寸でいいから顏だけでもみせてくれ、吉原の時分のお馴染だと追ッかけてまたいつて來た。——馴染とあつちやアこちとらの一存にも行かねえ、——折角よくなりかけたものを無理をしてまたぶり返さしてもつまらねえが、外へ出てまた氣が晴れるやうなら却つてそれもいゝだらう。——さう思つてお前の耳に入れるんだ。——どうでもお前の氣儘にしねえ。

おその。有難うございます。——それは、わたくし、やつていたゞきます。

清兵衞。さうはいふものゝ大丈夫か？——起居に苦しくはねえか？

おその。大、大丈夫でございます。

清兵衞。さうか。——手めえでさういふならたしかだらう。（奥へ向つて）お梶……

お梶、出て來る。

清兵衞。お梶、當人にさういつたら矢つ張行きてえさうだ。早く支度をしてやんねえ。

お梶。そんなら、そのまんまで、行つてすぐ歸つて來たはうがいゝ。

清兵衞。したが馴染の客といふもんだ。着附は華奢にしてやんねえ。——どんな御大身の一座かも知れぬえから下着は白無垢がいゝ、上は何でもいゝが帶はこの間拵へた蝦夷にしきを締めさせてやんねえ。

お梶。えゝ、さうしてやりませう。

清兵衞。それからあつちの座敷の膳をこつちへ持たしてよこしてくれ。

お梶。あい〳〵。

お梶、おそのをつれて奥へ行く。

間。

清兵衞、そばによつて長庵の死骸をあらためる。——女中の膳を運んで來るのにいそぎもとの座にもどる。——銚子の燗をつけて一つ二つ猪口を重ねる。——そのまゝぢつともの思ひにしづむ。

間。

お梶、座敷着に着替へたおそのをつれて出て來る。

おその。親方さん、それでは行つてまゐります。（手をついてさびしくいふ）

清兵衞。病中の門出だ。——一つ祝つて行きねえ。（猪口をとつておそのにさす）

お梶。さ、わたしがお酌しよう。

お梶、ついでやる。——おその、飲んで清兵衞に返す。——ふと氣味合。——おその密と泣く。

間。

清兵衞。さ、客が待つてるだらう、早く行きねえ。

おその。えゝ。

お梶。そこいらまでわたしが送つて上げようか？

清兵衞。何の、つい角を曲るばかりだ。——なア、おその……

おその。えゝ。——では、親方さん、お内儀さん、ずゐぶんとも御機嫌よろしう……

お梶。何だねえ、そんな、どこへでも行くやうに……

清兵衛。何の、さうぢやアねえ、それが當りめえだ。——お前こそ病人だ、隨分氣をつけて……機嫌よく勤めて來ねえ……

おその。有、有難うございます……

間。（……窓のそとに雪ふりいづ）

おその、出て行きかける。——堪へずそこに泣きくづれる。——と、舞臺暗くなる……

……舞臺あかるくなる。——屏風のうちに、おその、われとわが泣く聲に眼をさまして起直る。怯えたやうにあたりをみ廻す……

お梶、屏風をあける。

お梶。（晴れやかに）どうしたの、夢でもみたの？

おその、お梶の顏をみてやゝ安心したやうにほッと吐息をつく。

お梶。ちやうど好かつた、いまもうお粥が出來たから起さうと思つたところ。——あんまり食べないのも毒だから無理にでも食べておくれ。

おその。えゝ。

お梶。こゝへいまもつて來て上げるから……（さういひながら火鉢のまへに返る）

おその。（おづ〳〵と）あの……

お梶。えゝ？

おその。いゝえ、あの……親方さんは……

お梶。晝間、會所へ行つたきりまだ歸つて來ない。——どこを遊んであるいてゐるんだか……

おその。（再びおづ〳〵と）あの……雪がふつてをりませうか？

お梶。（わらつて）何をいつてゐるんだね、花が咲くといふのに雪がふつてどうするんだね？——今夜はいゝお月夜だよ。

おその。……

間。

おその、密と腕をまくつてみる。入ぼくろの何ともなつてゐないのにこゝろから安心する……

お梶、粥の鍋を下ろす……（幕）

（昭和二年五月）

浮世床小景

（三馬原作）

人物

主人
下剃
客の一
客の二
客の三
客の四
客の五
客の六
客の七
客の八
客の九
客の十

場所

江戸市中。梳髪舗「浮世床」の内部。

時

冬のはじめ。いまの時間にして午後三四時ごろ。

第一景

（象戯をさしてゐる客の一、客の二。――外にそれを見てゐる二三人。）

客の一。そこでお手に？

客の二。お手にはやま〳〵王が三枚飛車角六枚……

客の一。戯談だらう。

客の二。香桂さきに立たず、金角寺の和尚……

客の一。銀があるか？

客の二。銀も一分や二分はあり。

客の三。（側から口を出す）おツそろしく渡したもんだな。
客の一。構はねえのよ、駒で象戯はさゝねえ。
客の二。駒でさゝねえで盤でばかりさすか？——いゝだらう、それも。——それなら、大丈夫、自けつこねえ……
客の一。うるせえな。分つたよ、もう……（駒をすゝめる）
客の二。ふん、入王とさせまいか？——歩をなれとうて……
客の一。まづ金をいたゞき女郎衆と……
客の二。惜しい成金をとられたぞ。——惜しい成金を……と、えゝかうしろ。
客の一。待つたりよ。——これはこゝにゐたんだな？——そんならこの香でこの金を取らう。——かうは逃げめえ。
客の二。何だ、何だ、どうするんだ？——どうするんだ、そんな……？
客の一。……
客の二。あれだ。——手めえの駒で足りねえで人の駒までうごかしやアがる。——一人で兩方さす、器用だよ。——器用だよ、お前は。——とんだ若殿さまのお相手だ。——それでいゝか？——それでいゝのか？——何でも佛のいふ通りにしてやらア。——よくば、それ、引ツたくれんげの革

財布と、かうすれアどうだ？
客の一。來たな、おつに。——いゝとも、いくらでも來ねえ。——どうとも好きに責めねえ。——責められるゝが勤めの代り、だ……
客の二。おまへがたも精出して、お責めなさるが身のお勤め。——勤めといふ字に二つはない、テテン……
客の三。（口を出して）そこへ逃げる奴があるもんか。——その隣へ逃げてむだ駒をつかはせねえつてことがあるもんか……
客の四。いゝ手があるぢやアねえか。——そんないゝ手のあるのに……
客の三。目がくらんでるからみえねえんだ。
客の一。うるせえな、口を出すなつていふのに……
客の二。默つてくたばれ、何にもいふな……
客の一。何にもいふな、人ではないわ……
客の二。や、何にもいふな、人ではないわ……と、それどこへ行く？
客の一。こゝへ逃げる。
客の二。それどうだ？

客の一。もう一つ……
客の三。いけねえ〳〵……さう逃げちやアいけねえ……
客の四。それぴたりだ。
客の二。よんやまかせろさ、と……
客の一。よんやまかせろさ、と……
客の二。それ、よんやまかせろさ、と……
客の一。それ、よんや……
客の三。そ、そこだ〳〵。——油斷しちやアいけねえ、そ、そ……
客の二。はて、何にもいふな、人ではないわ……
客の一。や、人ではないわ……と取る……
客の四。いゝか〳〵、そんなことをして……？
客の二。そりや、何にもいふな、人ではないわ……と、さアどうだ？
客の一。……
客の二。どうだ、さア？
客の一。（未練たらし〳〵）さうか、畜生……

客の二。駄目々々〳〵、話にならねえ。——さ、つぎは誰だ？
客の三。よし、俺が敵をうつてやる……
客の四。いゝえ、待て、俺が出る……
客の三。まア待て、俺が……
客の二。へん、へぼめらが。——さア誰でも來い。
客の三。（客の一に）さ、退いた〳〵……
客の二。強いものとさすとへぼ象戲の筋が切れるとなア。
客の三。何をいやアがる。——その口を忘れるな……
捨臺詞いろ〳〵。客の二、客の三とまた勝負をつゞける。

第二景

（客の五。客の六。客の七）

客の五。（外を指して）みねえ、おい、あれを。——深い笠をかぶつて、觸つたらやぶけさうな羽織を着てあるいてゐる、あれが三十箇所の地主さまのなれの果だ……
客の六。角のどらか？

客の五。さまアねえや。――心がけが悪いとみんなあの通りだ。

客の六。が、いたはしさもいたはしい。

客の五。あの親父さんて人は伊勢から出て來て一代に仕上げたんだ。――その代り利勘で、今日は大分さかながみえるから、ちつと奢つて奉公人に食はせようといふ奴が、大きな皿に鯉の酢煎なら五匹ばかり、尾頭をならべて、鯉が小笠原流にしやにかまへてゐようといふものよ。小鰭なら今日買つて燒いて置いて、自身にあすの朝籠を下げて河岸へ行く。河岸中をぐる〳〵まはつても値が出來ねえから、土大根の折を買つて來て、昨日燒いた小鰭を一匹づゝ入れ、輪切大根の煮つけの、それが惣菜よ。――さかなといふものは頭にうまみのあるものだと爺さんがさきへ立つて、頭からそれをもり〳〵やるんだから、此奴、奉公人もみんなどうしたつてさうしなければならねえ。だからものに廢りがねえ。――年中朝が茶粥で、晝が汁ばかり、夜食は澤庵、それも鹽のあだ辛い奴だから二タ切で湯までの菜になる。今日は佛の日だといふのが、八盃豆腐の、平の中をゆる〳〵およいでゐようといふやつだ。――で、三度の飯の外に食ふものといへば、冷飯を干した糒の鹽いり、その中へ田舍から貰つた味噌豆を入れるといつても豆の數は鉦太鼓で探すほどしかねえ。その外には手めえ作りの醴、婆さんが上總ものだからたまにさつまいりといふ茶うけを拵へる。――外に奢りといふものさつぱりなしよ。――それには御先祖さまを大切に、出入のものには目をかける。――自然金が子を生んで家質は流れこむ、商ひは儲かる。――身代の出來るわけよ。

客の六。それはうちも親父もそいつてゐた。酒の出るのは夷比壽講ばかり、平生客のあるときは蕎麥を二つ鼻のさきへ置いて、さアどうぞ、遠慮なくどうぞといつたところでたつた二つだから客も一つしか手をつけない。――と、婆さんを呼んで、ではお相伴しよう、お前も頂戴しろと半分つつ食つたといふことだ。――それぢやア金のたまる道理だ……

客の五。それにしてもわづか三十年の間に、地面が三十二三ケ所、土藏が三十、穴藏が二十五六、手代子供ばかり四五十人。――出入の人數からかけたら大層なことだつた……

客の六。それをたつた二三年でつぶした……

客の五。それもみんなあのどらめのしたわざだ。――現在の親の葬ひに燒香すればつて役者の眞似をして社杙でゐざりあるく。――さういふ奴だから、末始終、ろくなことは仕出來すめえと思つてゐると案の條、それ藝者だ、たいこもちだ、何だかだとさま〴〵なものが入りこむ。――茶屋だ、女郎屋だ、すべつて轉んだで內外の物入は强くなる。仲間の取遣はあがつたり大明神。――そのくせ高慢に人をみ下しの、やれ文盲の俗物のと役にも立たねえ茶磨藝を鼻にかけて茶座敷ばかり何度こしらへたか知れねえ。――あゝなるのは自業自得……みんな不孝の罰だ……

客の六。（つく〳〵と）だが、それにしても、なくすといふ奴は早いもんだ。
客の五。さうともよ、一文の錢だつてあだやおろそかには儲からねえが……
客の六。つまりは、だが、料簡一つだ。
客の五。さういふうちにもみねえ、なかにはあゝいふ後生樂もゐるんだ……（外をまた指す）
客の六。あゝいふ？
客の五。あの、あすこの、向側を通る二人づれよ。
客の六。あゝ、あれか？——うれしさうに肩を引ツつけて、いちや〳〵して行くあの。——夫婦だらうか、あれ？
客の五。いづれはさうだらうが、野郎のはうの、あたまへ青黛をなすつたあのいやみな拵へはどうだ。——いまの陽氣だからいゝんだ、暑い時分でみねえ、下手に顏の汗をふいて色男を藍隈にする奴だ。
客の六。女も、あれア、たゞものぢやアないね。
客の五。ねえとも。——でなくつて晝日中、あんなあつかましい眞似の出來るわけがねえ。——人を人とおもはねえ擧動だ。
客の五。かゝア自慢の膏肓に入つた奴か。

客の六。女房膏肓の次第を御覽じろよ？——だが、あれも、あの女には大てい入揚げたこつちやアねえぜ、必と……
客の六。なぜ？
客の五。なぜつてさうだ。必とさうだ。——で、辛苦して、やう〳〵うちへ引つ込の、晝もたんすの鐶が鳴るといふ世界よ。——が、何だね、長えことはねえね。——よく持つて半年だね。……
客の六。何が？
客の五。何がつて、あいつらよ。——半年たつと、あの野郎、必と、あれ、あの女に打捨られるからみねえ。
客の六。可哀想に……
客の五。可哀想でも仕方がねえ。——決して、あの女、あの野郎に惚れちやアゐねえ。——もと〳〵野郎より女のはうが役者は上なんだ……
客の六。どうして分る？
客の五。どうしたつて分らアな。——一ト眼みれア、お前……
客の七、そのばへ來る。
客の七。何だ、何を力んでゐるんだ、一人で？

客の六。（ふり向いて）あゝ隱居さん……
客の七。何をみてゐる、先刻から？——何か通るのか、外を？
客の五。通つたんで、いま。——女づれの若え野郎が高慢な面アして、いま、向側を……
客の七。何だ、岡燒か？
客の五。ぢやアありませんよ。——安くするからいけねえ、隱居さんは……
客の七。（わらつて）いゝやな、まア。——人間、人の疝氣を頭痛にやむうちがいゝんだ。年をとつちやア、もう、その氣力もねえ。——どりや行つて來よう……
客の五。どこへおいでなさる？
客の七。久しぶりに色のところへ行つて逢つて來る。
客の五。えゝ？
客の七。これだ、これだ。（ふところから珠數を出してみせる）
客の五。あゝ寺參りか……
客の七。おいらの花は惣花にしても三十六文ですむ。
客の五。何年になります、亡つて？
客の七。婆さんか？

客の六。えゝ。
客の七。早いもんだ、今年もう七年だ……
客の六。何でせうね、これで、おんなじこつても、年をとつてからわかれた女房はそれほど力もおちますめえね？
客の七。それはさうは行かない。——何といつたつてそこは恩愛だ……
客の五。ぢやア、矢つ張、ときゞゝは思ひ出して……？
客の七。懷しくなるさ。……といふのも、社祢や帽子かいどりで謠をうたはして一しよになつた仲ぢやアない。——仲人が葛籠を背負つて左の手に鐵漿壺を下げ、右の手に酒を一升さげて來たものだ。——こつちはこつちで稼業からかへり、いまもう花嫁が來ると思ふから、豆腐を小半丁買つて、鰹節をかいてゐるとそこへお輿入だ。——仲人が指圖してすぐに花嫁が釜の下を焚きつける、仲人が味噌を摺る。——とゞ仲人のふところから出した鰨を燒いて三々九度。——さういふ苦勞した仲だ。——跡月まゐりそこなつたからさぞ待つてゐるこつたらう……
客の五。せいゝゝ、まア、そのつもりでよく拜んでおいでなせえ。
客の七。からかつちアいけない。（わらふ）——はい、どなたも御免……（そのまゝ出て行く）

第三景

（客の五、客の六、客の八、客の九、客の一、主人）

客の八。（うしろから）いつも氣のいゝ隱居だよなア。

客の五。結構人だ。

客の六。あゝいふ親をもつたせがれは仕合さ。

客の八。が、また、あのせがれもよく稼いで悧巧ものだ。――あれなら身上は大丈夫だ。

客の六。あれで、あの隱居も、若いときにはちつとは無駄な金もつかつたんだらうな？

客の五。なアにつかやアしねえ、口ばかりだ。

客の八。それだから悧巧だ。

客の五。通人だの通りものだのつて奴は、俺にいはせれば、全體野暮だ。――その證據にはみんな末をとげてゐねえ……

客の八。むかしの何とかいふ女郎も通人とは廓に入らねえのが通人だ。女郎買をして金をつかふものは遲かれ早かれ身上をしまふから結句野暮だといつたさうだが、悟つてみればそんなものかも知れねえ

客の六。角屋敷つひには野暮の手へわたり、か。

客の五。だからよ、通だの通りものだといはれて身上をしまふより、野暮だ、話せねえといはれて金をためたはうがずつと利方だ。いまの、あの、角のどらをみるまでもねえ。

主人。（急に此時口をだす）だから、こちどらなんぞ、疾うにもうその氣で通りものを止めてる……

客の五。何をいやアがる、どこの通りものだ？

主人。（わらつてそれにはこたへず）さア、八兵衞さん、來たり……

客の六。おつと、俺の番か？

主人。すぐにやらう。

客の六。今日は一つ油をつけてもらはうか。水髮にばかり結ふと毛が切れるといふから……

主人。切れたつていゝぢやアねえか？

客の六。さうは行かない、俺だつて、まだ……

主人。色氣がある、か？

客の六。でもないが。

主人。道心堅固なことをいふ口の下ですぐそれだ。

客の八。それと知りつゝ迷ふ奴さ。――なア八さん……（トいひかけて外をみる）おや、長六ぢやアね

えか？

客の五。えゝ？

客の八。いゝえよ、そこへ來たの……

客の五。そこへ？（おなじくまた外をみて）さうだ、長六だ。——へんな奴だな、にや〳〵して。——

（聲をかける）何だつてそんなところに立つてゐるんだ。——入んねえな、こつちへ……

客の九、入つて來る。

客の九。はツきりしねえな。

客の五。うむ、すつかり今日はしぐれた。——よく倦きずに天氣がつゞいたもの。——何を、お前、ふところに入れてゐるんだ？

客の九。新道の八百屋から猫をもらつて來た。

客の五。猫を？——仔猫か？

客の九。眼のまだあいたばかりの奴だ。——名をつけるんだがいゝ名はあるめえか？

客の五。どんなのがいゝ？

客の九。駒だの福だのは古いから、何とかゝう、武張つた、強さうな名がつけてえ。

客の九。（わらつて）そんなら辨慶とつけたらいゝだらう。

客の五。辨慶？——辨慶でもあるめえ。

客の八。そんなら朝比奈か金時……

客の五。いつそ飛んで關羽はどうだ？

客の九。みんないけねえ。

客の五。どうして？

客の九。めすなんだ、この猫……

客の五。氣のきかねえ。——ぢやア巴御前だ。

客の九。呼びにくいな、巴御前は。——ちよツ〳〵〳〵巴御前來い、巴御前來い、巴御前來い……いけねえ、舌がまはらねえ。

客の五。巴といひねえな。

客の九。巴來い、巴來い、巴來い。——巴、巴、巴……矢つ張いけねえや。

客の八。そんなら板額だ。

客の九。板額來い、板額來い、——板額來、板額來、板額來……

客の五。（わらつて）反魂香、反魂香、反魂香と聞えやアがる。

客の九。いけねえ、いけねえ。

客の一。（象戯の仲間を抜けて出て來る）待て、待て、俺がいまつけてやる……

客の五。象戯はもう止めか？

客の一。止めぢやアねえ、中休みだ。——虎とつけねえ、虎と。——惡いことはいはねえから虎とつけねえ。

客の五。なぜ？

客の一。強い事にかけたら虎ほど強いものはねえ。——だから強さうな名がいゝなら虎とつけねえ。

客の八。だが龍虎梅竹といふぜ。——虎も強いがさういつたら龍のはうが虎よりもつと強い。

客の五。それはさうだ。虎と龍と戰ふと龍は飛あるくことと自在だからとても虎はかなはねえ。

客の九。なるほど。——ぢやア龍としよう。

客の五。龍來い、龍來い。——どツこい〳〵と聞える……

客の一。しかし何だぜ、さういつたら龍だつて雲がなくつちやアはじまらねえぜ。

客の九。さうだ、雲にはかなはねえ。——ぢやア雲にしよう？

客の五。雲だつてさういつたら風には一ト溜りもねえ。——だから風のはうが上だ。

客の八。そんなことをいつたら、風だつて、障子を閉めたらそれつきりだ。めつたに吹きこむこつちやアねえ。——してみりやア風より障子のはうが強い。

客の九。それはさうだ。

客の一。いゝえ、待ちねえ、障子だつて鼠には嚙られる。——してみりやア鼠のはうがもつと強い。

客の五。鼠は、だが、猫にはかなはねえ。——鼠より猫のはうがずつと強い。

客の八。そんなら何も苦勞するこたアねえ、それでもういゝぢやアねえか？

客の一。なぜ？

客の八。いつそ猫とつければいゝ。

客の九。猫と……（ト自分にいつてみて）あゝさうか……

このとき、猫、客の九のふところで一ト聲ニャアと鳴く。

客の一。何をいやアがる……

客の五、客の八、客の九、みな〳〵わらふ。

第四景

（客の六、主人。——象戯の仲間三四人）

客の六。……それアさうだ。——諸事さうなつたんだ。——時の流俗つてものは不思議なものだ。

主人。こちとらの餓鬼の時分には、大三十日のあけがたにまだ、扇子〳〵と賣つて來て、その聲

を聞くとわけもなく春めいた氣のしたもんだが、いまぢやアそれもさつぱりなくなつた。

客の六。　さういへば元日の朝、沙魚賣だの福壽草賣だのが來ていかにも元日らしい心もちがしたつけが、このごろぢやアいつにも沙魚賣の聲なんぞ聞いたことがない。

主　人。　それには何事にも氣が早くなつた。――近いためしが納豆だ。――こちとらは冬でなくツちやア喰はねえものと思つてゐるのに、このごろでは八月のはじめから納豆汁だ。――で、肝心の霜月時分には納豆々々の聲もしねえ。――いやになツちまふ……

客の六。　われ〳〵にしてがさうだから、あの横町の肝右衞門さんなんぞのいつもやかましくいひなさるのに無理はない。――尤ものわけだ……

主　人。　全くそれは、肝右衞門さんの臺詞ぢやアねえが・芝居の狂言でも以前は荒事が第一だつた。――荒事師がフツと一ト吹ふくと二三十人のぺえ〳〵役者が揚幕のはうへ吹きとばされる。――舞臺一めんの大島臺に役者が殘らず乘り、だん〳〵それがせりあげになると、その大島臺を大太刀の柄のさきにつツかけ、握りツ拳をあごへあてた奴が眼をむいてせり出す。――栢莚のうはさをしちやアよくぢいさんがさういひ〳〵したが、いまどきそんなことをしたら誰もみるものはねえ。

客の六。　それにはつらねといふものが廢り切つた。

主　人。　いくら長ツたらしい文句でも昔の見物は耳をすまして聞いてゐた。――それだけみせるはうも優長ならみるはうも優長だつた。――敵役は藍隈か赤ツつら、立役はちよいとだけ眼の緣へ紅をさす、だから出て來るとすぐ、あゝあれはどういふ役だと分つたが、いまは敵役も立役もおんなしやうに白く塗るからどれが惡でどれが實か分らない。――むかしつからの見物はみんなそいつてる……

客の六。　すゝんだといへばそれだけすゝんだわけだ。――七十幾つになるぢいさんが十四五の娘形になつたといふのはむかしのことで、そのころの人はそれでよかつたものゝ、いまの世の中ではそれぢやアすまない。お半はお半に釣合つた年ごろの役者、お千代はお千代に似合つた年配の役者でなければ情がうつツて來なくなつた。――狂言と地との差別がだん〳〵なくなつて來た。

主　人。　だからつまりは、水も本水をつかへば、飯もほんたうに喰ひ、芋もほんたうの芋を洗つて鍋へ入れ、ほんたうの火にかけて煮てみせねえぢやア納らなくなつた。――時の鐘だつて銅鑼を叩いたものが本釣になる、鐵砲だつていまぢやア竹筒へ煙消をこめた本鐵砲といふ奴だ。――この鹽梅で行つたら、このさき、どんなことになり行くか分らねえ。

客の六。　いまに、それこそ、濡事も女形ではといふことになつてほんたうの女をつかふやうになり、敵役の首だつてほんものゝ刀でほんたうに斬るやうになるかも知れない。

主　人。そんなことをしたらしかし、日に一人づゝでも敵役の役者が命をおとさなけれアならねえ。——眞逆にだからさうまではしねえだらうが、濡事のはうは、いまに女の役は女でなくつちやアならねえときが必と來る。——必となるに違えねえ、さういふことに……

客の六。しかしさうなつたら事だ。

主　人。事だとも、それは。

客の六。さうなつたら變るだらうなア、世の中も……

主　人。それこそらんぴ亂國だ。——二二が四、二三が六と、物事それこそ丁度ツこには行かなくなる……

客の六。（しみ〳〵と）さうだらうなア（……このとき象戲の仲間に爭論はじまる）

第五景

（客の一、客の二、客の三、客の四、客の五、客の八、主人、その他。）

客の三。……何だ、此奴らは。——ふざけるのもいゝ加減にしろ。——詰まうと詰むめえと手めえたちの世話にはならねえんだ。——手めえたちを相手にさしてる象戲ぢやアねえんだ。——默つてればいゝ氣になつてつべこべ側から入らざることをいやアがる。——側でそんなにぐづ〳〵いはねえで、男なら此奴ら、一人づゝ出て來て尋常に勝負しろ。口幅つてえことをいふやうだが、手前らに負けるやうなそんな耄碌はまだしねえんだ。——相手はへぼだ、多寡の知れたこんなへぼだ。……さう思へばこそ此方は、——大人げねえから此方はそのつもりではじめからかゝつてゐるんだ。——それだつて負けねえとは限らねえ。勝負は時の運だ。時の表裏でどうなるか分らねえ。——それも知らねえでわい〳〵鬼の首でもとつたやうに騷ぎやアがる。——承知が出來ねえ。——さア料簡が出來ねえ……（わけもなくいきり立つ）

客の二。待ちねえ。——一寸待ちねえ。——いま聞いてゐれば何だつて？——相手はへぼだ、多寡の知れたへぼだ？——わるかつたね、へぼで惡かつたね。——だが、俺がへぼなら手めえは何だ？そのへぼの俺に負ける手めえは何だ？

客の三。何をいやアがる。人が甘茶をなめさせりやアいゝ氣になりやがつて……

客の二。何だ、甘茶だ？——くそでもくらへ。それならなぜあんなに待つたをしやアがつた？

客の三。一度や二度待つたをしたのが何だ？——その代り手めえのはうには助言をする奴がついてゐるんぢやアねえか。——うるせえほど側にゐて口を出す奴がゐるんぢやアねえか。——俺のはうにはそんなものはゐねえんだ。——そんなけちなものはけちりんぼどもゐねえんだ。

客の二。何だ、けちなものだ？——けちなものとは何だ？——けちなものとは何て言草だ？

客の三。けちなものだからけちなものといつたんだ。——けちだからけちといつたんだ。——それで悪けりや表へ出ろ……

客の二。表へ出ろ？——いゝとも、出てやる。——しやらくせえことぬかすな……

客の三。さア出ろ、——早く出ろ……（立上る）

客の四。（とめる）何だなア、源さん、どうしたもんだ？——お前でもねえ、しづかにしねえな——そんな大きな聲を出してみツともねえぢやアねえか……

客の三。みツともねえ？

客の四。さうぢやアねえか、みツともねえぢやアねえか。——多寡が象戲に負けたツくれえでそんな、外聞がわるいぢアねえか……

客の三。ぢやア何で助言した？——何だつてよけいな口出しをしやアがつた？——そも〳〵手めえたちのそんなことしやアがるのが間違えなんだ。——それだからみえる手もみえなかつたんだ。——そのためにかゝなくつてもいゝ恥をけえたんだ……

客の一。（宥める）いゝぢやアねえか、まア。——そんなお前のやうにいつたつて仕方がねえ。

客の三。仕方がねえ？——仕方がねえとは何だ。——さ、かうなれば手めえも相手だ。——手めえ俺に何のうらみがあるんだ？——何の意趣遺恨があるんだ？

客の一。何をいやアがる。——誰が手めえなんぞに意趣遺恨がある……

客の三。いゝや、ある。——あるに違えねえ。——なくつてあんな助言のしざまの出來るもんぢやアねえ。——平生から俺は手めえつてものが氣に入らねえんだ……

客の一。大きにお世話だ。——象戲に負けて腹を立てるやうな唐變木とははゞかんながら一つにならねえんだ。

客の三。何、唐變木だ？

客の五。（み兼ねて口を出す）いゝぢやアねえか、もう。——いつまでそんなつまらねえことといつたつてはじまらねえぢやアねえか……

客の八。（ともゞ〳〵口を出して）いゝ加減にもう料簡しねえよ……

客の三。嫌だ、料簡しねえ。——誰が何といつても今日は料簡しねえ……

客の五。いゝぢやアねえか、そんな强情張らなくつたつて。——大ていにしねえ。——よう、大ていにしねえ……

客の三。嫌だ。——嫌だといつたらいやだ。——どいつも此奴もたゞはおかねえ。——さア出ろ、さアおもてへ出ろ……

客の二。出ねえでよ。——（客の一に）太吉、こんな奴を打捨つといたらくせになる——出ろといふ

んだから手めえも一しよに出ろ……
客の一。出るとも。――こんな野郎に……こんなものゝ分らねえ野郎にけじめをくつたら男が立たねえ……
客の三。そんなことをいやアがつて逃げるなよ……
客の一。誰が逃げる。――さういふ手めえこそ逃げるな……
……客の一、客の二、客の三、客の四、その他そばに居合せたものすべて、わけもなくわい〳〵いひながら外へ出る。――罵つたりわめいたりする氣配しばらくつゞいてそのまゝ遠ざかる。

第六景

（客の五、客の六、客の八、客の九、客の十、主人。）
客の五。何だ、彼奴ら。――まるで狂人の沙汰だ……
客の九。象戲に負けるとあんなにも口惜しいもんだらうか？
客の八。（わらつて）あれは別だ。――あんなのはめつたにねえ。
主　人。平生はあんなぢやアねえんだが。――ものゝ理合もよく分るんだが……
客の五。誰よ？

主　人。いゝえ、源さんさ。
客の五。あゝもしかし夢中になる……といふよりなれるものかしら？　――可笑しいと思ふよ、俺は……
客の九。何のこたアねえ、酒に醉つたやうな……
他の六。それだつたら手もなく酒亂だ。
客の五。いゝえ、それならさうのやうにまた始末がいゝ。――いつそ世話がねえのさ。――素面であゝ魂を宙につるし上げツちまつたら手のつけやうがねえ……
主　人。外の手合もよくねえ。……さういふ疾病のあるのを知りつゝ寄つて集つてやい〳〵いふんだから。――あれぢやア誰だつてカン〳〵になる。――勝てる象戲だつてあれぢやア勝てねえ……
客の五。（わらつて）それはさうだ。――あれは助言なんてものぢやアねえ、ぶち壞しだ。――腹を立てるのも尤もは尤もだ。
主　人。片つ方も、また、止せばいゝのに高慢をいふから……
客の六。が、それにしても、あゝまで是非善惡の分らなくなるものだらうか？
客の八。だからよ。……だから怖いといふんだ、勝負事は……
客の六。さうだらうかねえ。

客の九。大丈夫だらうか、しかし？
客の五。何が？
客の九。間違えにならねえだらうか、外へ行つて？
客の五。それは大丈夫だ。——太吉でも、金藏でも、あのまんまぢやア引つ込がつかねえから出て行つたまでだ。——それには留めてもゐるんだからその心配はねえ。
客の九。そんならいゝが……

客の十、このときおもてへ來る。

客の十。（いきなり主人に）鬢さん、こゝへ卯之の野郎は來なかつたか？
主人。何だ、寅さん、藪から棒に……
客の十。いゝえ、卯之の野郎が來なかつたか聞くんだ？
主人。卯之さんと、さア……？（下剃に）留、來たつけか、卯之さん？
下剃。一寸さつき來ました。
主人。あゝさうだ、來たつけ。——だが、來て今日はすぐ歸つた。
客の十。いつ時分だつた？
主人。さア、あれは、晝すこオしまへ……だつたなア、留……

下剃。えゝ、そんなこつてした。
客の十。晝すこオしまへ、と？——はて、それぢやアどこへ行きやアがつたらう？
主人。どうかしたのか、卯之さん？
客の十。（それにはこたへず）で、どんな風だつた？——別段かはつたところはなかつたか？
主人。かはつたところ？
客の十。うむ、どツかいつもと……？
主人。さういやアぼんやりしてゐた。——いつになくぼんやりして、さうだ、しきりに溜息をついてゐた。
客の十。ぼんやりしてしきりに溜息を？
客の五。（口を出す）ど、どうしたんだ？——何か出來たのか？
客の十。うむ、出來たんだ。
客の五。どんなことが出來た？
客の十。とんでもねえこつた。
客の五。とんでもねえこと——それは誰に？——眞逆卯之公の……？
客の十。それが卯之の野郎の身の上なんだ……

客の八。まアこつちへ入んねえ。――そんなとこに立つてねえでこつちへ入んねえ。
客の十。うむ。
客の十、入つて來る。みな〳〵そのそばによる。
客の五。一體それは……？
客の八。どういふんだ、それ……？
主　人。眞逆しかし……？
（ほとんど同時に）
客の十。それよりもお前たちはあの野郎をどう思ふ？
客の五。どう思ふ？
客の十。馬鹿と思ふか悧巧ものと思ふか？
客の八。馬鹿とも思はねえが、さア、それほど　悧巧ものとも思はねえ。
客の十。甲斐性のあるはうと思ふかないはうと思ふか？
主　人。あんまりあるはうとは思はねえ。
客の十。身を粉にしてがせいに稼ぐはうかノラクラするはうか？
客の五。それはまア、始終こゝへ來てごろツちやらしてゐる位だからがせいにさう稼がうはずはねえ？

客の八。と、あんまり評判はかんばしいはうぢやアねえな？
客の五。まづね。
客の八。けど、人間はごくのいゝもんだぜ。
主　人。いたつて肚は綺麗だ。
客の十。その卯之の野郎が――もしその卯之の野郎が急に分限者にでもなつたとしたらお前たちどうする？
客の六。分限者に？
客の十。さうよ、大金持に。
主　人。（急にわらつて）そんな夢みてえな……
客の十。……ことでねえんだからばか〳〵しい。――千五百兩といふ金と地面が二ケ所……それも沽券の千兩、千五百兩といふ奴が急に今度あの野郎のふところへ轉がりこんで來たんだ。
主　人。ど、どうして？
客の五。どうしてそんな？
客の十。それがよ、あの野郎に伯母さまが一人あつたんだ。
主　人。うん……（うなづく）

客の十。その伯母さまが先月の末死んだんだ。
客の五。その伯母さま、外にみよりはなかつたのか？
客の十。なかつたかどうか知らねえがさういひ殘して死んだんだ。——平生からあのやくざな野郎を可愛がつてとき〴〵はいま〻でゞも小遣なんぞとゞけてよこしてゐたんだ。
客の六。で、卯之さん、さういふもの〻來るのを自分では……
客の十。知らなかつたんだ。夢にも知らなかつたんだ。——だから、昨日、さきから人が來てそのいちらつを聞くとすぐ氣拔けのしたやうになつちまつた。
主　人。びツくりしてか？
客の十。……かも知れねえが、そのま〻ふらツとうちを出、どこへ行つたのか昨夜遲くなつてぼんやり歸つて來た。——で、今朝になるとまた起きぬけにうちを出て飯どきになつても歸らない。——うちのものは、だから、どこへ行つたかとみんな心配してゐる……
主　人。それだつたら何もぼんやりしちまふことはねえだらうに。——先刻あんな溜息をつくことだつてねえだらうに。——可笑しな男だぜ……
客の八。い〻え。それはさうぢやアねえ、ぼんやりするはうがそれが至當だ。
主　人。なぜ？

客の八。なぜつてさうだ。——話を聞いたゞけでも俺は心細くなつた。——浮世がいやになつた。
客の六。（歎息するやうに）つまりは運だ。——運のい〻奴にはかなはねえんだ。
一同、ゆくりなく寂しい心もちにつゝまれる。

第七景

（客の五、客の六、客の八、客の九、客の十、主人、下剃。）

客の六。どれ行かう。——すつかり今日は油を賣つた……
主　人。これから何處へ行くね。
客の六。これから今日は龍藏がつかひものをして盃を嘗めて來るんだ。
主　人。お目出度か？
客の六。みたようなもんだ。
主　人。飲めさうなかツぷくをして下戸だから可笑しい。
客の六。酒は飲まず、煙草は吸はず、勝負事は一切やらず。——これで身上が出來なければ生きてる甲斐はない。
主　人。だから出來たぢやアねえか。

客の六。いまだつて二二が四、二三が六と物事さう丁度つこには行つてゐないんだ。——おいらも伯母さまが一人ほしい。——いや、ぢやア、おさきへ……

客の六、つまらなさうに歩つて行く。

客の五。（ふいとあくびをして）さア、こつちもそろ〳〵神輿を上げるか。——どうだ、銀さん……

客の八。うむ、行かう。

客の五。長っ尻だよなア、みんな……

客の八。手めえで知つてればいゝ。

客の九。俺もぢやア歩らう。——そこまで一しょに行かう……

客の五。角ですぐわかれるんぢやアねえか。

客の九。でも氣はこゝろだ。

客の五。あんなことをいやアがる……

客の五、客の六、客の九、立上る。

客の十。待ちねえ、待ちねえ、俺も行くから……

主　人。歩り風が立つとみんな一しょだぜ。——遊んで行きねえよ、もつと。

客の十。でも、俺も、卯之を探さなくつちやアいけねえ。——さうでもねえ、間違えでもあると……

主　人。そんなことがあるものか、大丈夫だ。

客の十。さうでねえ、こんなときには、どんなまた魔がさゝねえと限らねえ。——用心に如くはねえ……

捨臺詞いろ〳〵。——客の五をさきに、客の八、客の九、客の十、歩りかける。

客の八。（ふッと思ひ出したやうに）あゝさうだ、——鬚さん、明日の安兵衛さんの葬ひは何時だつけね？

主　人。たしか四つと思つたが……

客の八。寺は？

主　人。それが遠いんだ、目黒の銷藥師からまだ十五六丁もさきだ……

客の八。其奴ア事だな。

主　人。だが、葬ひは、遠くつても近くつてもどのみち一日つぶれるんだ。——早く歩つたつて何にも出來やアしねえ。

客の八。それもさうだ。——お前も行くだらう？

主　人。行くとも。——あの人とは久しい馴染だつた……

客の八。ぢやア、また、明日逢はうぜ。

主人。うむ、逢はう。

客の八、出て行く。

第八景

（主人、下剃。）

主人。留、手の空いたところでおもてを掃いてしまへ。

下剃。えゝ。

下剃、外へ出る。

主人。（小聲でうたふ）今日はとりわけいろ〳〵と、いふこと聞くことたんとある、その約束で今朝早う……

下剃、入つて來る。

下剃。親方、雨がふつて來ました。

主人。ふつて來た？

下剃。えゝ。

主人、耳を澄ます。——雨の音きこゆ。

主人。うむ、ふつて來た。——ふり出しがわるいから此奴は明日は降りだ……

下剃。えゝ。

主人。これでだん〳〵寒くなるんだ……

下剃。……

主人。可哀想にしかし、いま歸つた手合は、ちつとのところでずぶ濡れだ……

下剃。……

……雨の音やゝ高く聞ゆ。

（昭和二年九月。——東京中央放送局のために）

辰巳婦言

（三）馬原作

人物

藤兵衛　滑川酒店の番頭。
喜之助　雪の下穀屋の息子。
長五郎　市川組の侠客。
おとま　古市場二川屋の板がしら。
外に、廻しの女、娘分、げいしや、男げいしや、船頭、その他。

時。江戸時代、冬。

場所。鎌倉手越の里古市場

第一幕

第一場

……新市場の橋の下。日の暮。――一さうの猪牙、喜之助を乗せて古市場のはうへ行く。

喜之助。（空を見上げて）ふらなければいゝが……

船　頭。（艫を押しながら）なアに、今夜はうけあひます。

間。

遠に古市場のはうから藤兵衛を乗せた猪牙出て來る。

藤兵衛。いますれ違つた船は、あれは……

船　頭。（艫を押しながら）二川屋の客さ。

藤兵衛。みた面だが……

船　頭。雪の下から來る喜之さんさ。

藤兵衛。あいつがさうか……（嘲りのいろを浮べる）

……漕ぎ去る。

第二場

古市場二川屋の二階。――長五郎、おとまと二人で酒を飲んでゐる。

長五郎。（さかづきをとつて）ついでくんねえ。
おとま。およしよ、もう……
長五郎。なぜ。
おとま。毒だよ、そんなに。
長五郎。ばかアいへ。好きな酒をばやめろぢやないが茶碗酒をばやめさんせ。――潮來にあるのを知らねえか。――だから俺はがぶ〳〵はくらはねえ。――手めえこそ癇癪を起して呻らねえやうに用心しろ。
おとま。大きにお世話だよ。
長五郎。ふん、勝手にしやアがれ。（横を向く）
おとま。勝手にするよ。――勝手にして裾研（すそとぎ）へ行くよ。
長五郎。何？。
おとま。かくしたつて駄目だよ、ちやんと種が上つてゐるんだから。

長五郎。何をいつてやアがるんだ。――友だちの附合で行つたのに何の不思議がある？
おとま。だからいゝ働きだよ。
長五郎。誰が、また、そんなことをいやアがつたんだ。――入らざるそんなかな棒を曳きやアがつたんだ。
おとま。誰でもいゝよ。――親切にさういつて知らせてくれた人があるんだから……
長五郎。……（幾分間のわるきこなし）
おとま。今日も子供屋のをばさんがしみ〴〵意見するぢやアないか。――それだつてまた、人の意見をこはがる位なら、こんな裸にまでなつて、いまゝでお前を呼び通しやアしない。わたしだつて意地がある。人ウつけ、鞍替したつてわたしはお前を離しやアしない。――それをお前は――お前のはうぢやアわたしのさう思ふ半分もわたしのことを思つちやアくれないんだから……
長五郎。……
おとま。いつそもうくさ〳〵してたまらないから、用事をつけて引込んでゐれば、こゝのうちをはじめ何のかのとやかましくいふし。――ほんたうに、もう、わたし……
長五郎。（遮るやうに）愚癡をいふねえ、手めえらしくもねえ。――愚癡をいやアどうなるんだ。
おとま。だつて、お前……

長五郎。そんな小うるせえこと吐しやア屋體骨をたゝまして……

おとま。あれ、そんな大きな聲おしでないよ。

長五郎。（低い聲で）と叱られる奴よ。——何をいふにも借だらけだから始らねえ。——いつかの櫛のしのぎもいろ〳〵やりくつてみたがどうにもならねえ。やつとのこと利上をしてくゝりつけた。——今年のやうにかう目の出ねえのもめづらしい。（しをれる）

おとま。さう思ふからわたしだつていろ〳〵あんもんしてゐるんだよ。——それ、新川のお客ね？

長五郎。新川の？

おとま。藤印さ。

長五郎。うむ、どうした、彼奴？

おとま。いゝえ、こゝんところまた三日にあげず來るんだよ。——今日も來ていまかへつたのさ。——ちやうどいゝから、いろ〳〵つうくつしてやつとこれだけこしらへた。（帶の間から出す）十兩と外に一兩二分。——どうせ足りないとは思ふけど……

長五郎。すまねえ。——この恩はわすれねえ。

おとま。定りいつてる。——それより、お前、入つたと思つて無駄づかひしないでおくれ。——少しづゝでも不義理のはうを濟すやうにしておくれ。——さうでないと、わたし——いまにわたしが行くとなつたつて……

長五郎。分つてるよ。——いはなくたつて分つてる。——お前ばかりに苦勞はさせねえ。——その位な料簡は俺だつてもつてゐる。

おとま。まだ雪の下から來るお客にもちつとばかりあてゝ置いたけど、このはうは初仕舞のお客だから……

長五郎。雪の下といふのはあの喜之助といふ若えのか？

おとま。あゝ。——部屋住でもしつかりしたうちの一人息子ださうだから……

長五郎。（歎息するやうに）金持にやア何がなる……

おとま。それより、お前、おつ母さんの病氣はどうなの？

長五郎。まだいけねえ。——惡いときお袋に患はれたんでなほのことしがくがつかねえ。

おとま。喰べるものは？

長五郎。でも、ちつとづゝは喰へるさうだ。

おとま。さうだぢやアないよ。人まかせでなくちつとは自分で氣をつけなくちやア、お前。——一體だれがついてゐるの、そばに？

長五郎。傅ひ婆アとも思つたんだか、どつちにしてもおんなしだから、毒のふき出した野郎だの建

前からおつこちた居候だのをあてがつてある。

おとま。さぞ氣のつかないことだらうね？。

長五郎。木ツ葉喧嘩をしちやア酒をくらふことより知らねえ奴らだ。

おとま。（急に）おとなしくなつておくれよ、お前さん。——こんなときこそ女房の役と思つてもいまの身の上ぢやアどうすることも出來やアしない。

長五郎。……

おとま。わたしは、ほんたうに、實のおつ母さんの患つたより心配してゐるんだよ。

長五郎。……

おとま。どつちへまはつたつていまのまんまぢやア末がとげられない。——さう思ふとわたしは心細くつて、——もう少し親身になつてくれない分には……

長五郎。（うなづいて）すつぱり、ぢやア、禁酒だ。

おとま。……？

長五郎。さうすりやアいゝんだ。——さうすりやアいさくさねえんだ……

おとま。さういへばそんな。——何もさうまでしなくつたつて……

長五郎。いゝや、さうぢやアねえ、酒を飲むから間違ひが起るんだ。

おとま。……

長五郎。手めえがそんなに案じてくれるのに俺アよつぽど不孝もんだ。——俺にしたつて氣がつかねえぢやアねえ。——俺のやうな奴は早く死ぬがましだらう……

おとま。かうしていろんなことを思ふせゐか、わたしはもう、常住お前のところへ行つた夢ばかりみる。——さうしちやア目をさましてつまらない思ひをする……

長五郎。……

おとま。板もとの板がしらの。——さういはれて負けない氣になつて稼ぐ。——何のそれがたそくになるんだらう？——しみ〴〵わたしはこの稼業が嫌になつた……

長五郎。それは俺とつておんなしだ。かうして、まア、町抱で候の、出入場で候のとみかけはいさみで暮すやうだが裏へまはれば親方倒れの子分すたりといふ奴よ、仲間の奴らに引立てられるだけいざとなると此奴大きなこつた。——それもこれも苦界と思やアあきらめがつく。もうちつとの辛抱だ。——五大力ではわしやなけれどもだ。

おとま。緣と時節の末を待て。——おツつけお前に御膳をたかせて思入朝寢をしようよ。

長五郎。自前でもかせがねえやうにしろ。

おとま。よしとくれ、そんなんぢやアないんだから。

長五郎。（身ぶるひして）寒い。――ぞく〳〵しやアがる……

おとま。お酒がさめて來たんだらう？

長五郎。さうかも知れねえ。

おとま。もう一つ熱いのをもらはうよ。

長五郎。それには及ばねえ。

おとま。（わらつて）急に遠慮しなくつてもいゝよ。

長五郎。それよりあつちの客が待つてゐるだらう。早く行つてやんねえ。

おとま。いゝんだよ。

障子の外に廻しの女（お八重）來る。

お八重。おとまさん、一寸……

おとま。あい、いま行くよ。

お八重、去る。

長五郎。いはねえこつちやアねえ、御上使のお入だ。

おとま。惡く、また、今夜は落合つたもんだもの。

長五郎。だから早く行けよ。

おとま。行くよ、そんなに邪魔にしなくつても。――いやならいやで出て行くけど親方は來なくつてもいゝんだね？

長五郎。何？

おとま。三行半ぢやアすまないよ。

長五郎。半も長もあるものか、判人袋の緒が切れた、きり〳〵出てうしやアがれ。――と、まア、夫婦喧嘩の紋切形はこんなものよ。

おとま。いまのうちから稽古して置かうかね。――だが、去られた心もちはどんなだらう？

長五郎。まんざらでもあるめえよ。

おとま。その氣で行つて來よう。――熱いのをいま持つてよこさせるから……（障子の外へ出る）

間。

近くの座敷の廻りいたこ聞える。――わたしや出雲にとり殘されて男冥利につきたのか……

長五郎。ふん、何とかいつてやアがる……（冷えた酒をついで飲む）

第三場

前の場と同じく二川屋の二階。（前の場の座敷より廣くみつきもよし）――喜之助、氣のすまぬかほ

辰巳婦言

で一人すわつてゐる。

前の場の廻りいたこ、こゝへも遠くきこえて來る。——心がらとはわしやいひながらひよんな苦勞をするわいな……

おとま、入つて來る。

おとま。喜之さん……（座敷のなかをみまはして）あら、誰もゐないの？

喜之助。……（無言。——眼をそらす）

おとま。どうしたの？——何をさうむづかしい顏をしてゐるの？（喜之助により添つてすわる）

喜之助。……（無言）

おとま。嫌だわ、ぼんたうに（わらふ）——およしなさいよ、そんな……

喜之助。（突きのけるやうに）大きにお世話だ。

おとま。まア……

喜之助。いかに俺が——いかに俺が間抜だつてその手にもうのるものか。

おとま。何をいふの？——それは、お前、何をいふの？

喜之助。自分の胸に聞くがいゝ。

おとま。妙なことをいふのね。——（わらつて、また）およしなさいよ、人じらしな……

喜之助。それはこつちでいふこつた。

おとま。……（喜之助の顏をみる）

喜之助。白ばつくれるもいゝ加減にしろ。

おとま。無理だわ。——無理ですわ、それは、——何にもその理由もいはないで……

喜之助。理由は、だから、そつちの胸に聞けといふんだ。——胸で分らなければ腕に聞け。

おとま。（思はず）えゝ？

喜之助。（かぶせて）ざまアみろ、驚いたらう……

おとま。……（眼をふせる）

喜之助。酷いのがうき世とは聞いてゐた。——だが、かうまで、酷い、果敢ないものとは思はなかつた。——はじめて眼がさめた、俺は。——だが、辛くするならするやうに、邪慳にするならするやうに、なぜもつとすつぱりとさうしないんだ。——綺麗になぜ船宿のまへで突出さないんだ。

おとま。……

喜之助。そんなことゝは知らないから、のろい奴が、蚊にくはれてもこつちの腕だけは、後生大事に上からさすつて我慢してゐたんだ。——そんな彫もの、さきぢやア疾うに消してゐると友だちにいはれても、たきつけたつて誰が眞にうけるもんかとわらつて多寡をくゝつてゐたんだ。——

三度に一度、さうでもないと思つても野暮つたく改められるもんぢやアない、うつかりしたことをいつて料簡をみられることもない、默つてゐるに如くはない。——と、さう思つたのもつまりはそつちを買被つてゐたからだ。——そんな腐つた性根とは思はなかつたからだ……

おとま。……

喜之助。いつまで未練なことはいはない。——これだけいへばそれでいゝんだ。（いきなり火鉢のなかゝら燒火箸をとつてわが腕のおとまの名を彫つたほりものを燒消さうとする）

おとま。（驚いてその手にすがる）ま、待つて下さい。——喜之さん、待つて下さい……

喜之助。何をするんだ。——何だつて止めるんだ……

おとま。そりやア短氣です。——あんまりそりやア短氣です……

喜之助。何が短氣だ。——そつちが消したからこつちも消すんだ。——はつきり出入をつけてやるんだ……

おとま。さういつちやア、お前、實もふたもない。——わたしの心を知らないやうに。——後生だから——後生だから聞いて下さい。——一ト言、喜之さん、聞いて下さい……

おとま、無理に火箸を喜之助の手からもぎとる。——機みに、おとま、やけどする……

おとま。熱ツ……

喜之助。……（驚く。——が、冷かにみてみないふりする）

近くの座敷のいたこ。——智慧もきりやうもないわし故に心つくせどあだになる……

おとま。これにはいろ〳〵經緯（いてたて）があります——一圖にさうお前のやうに……（うつむいて）といふのも、いゝえ、つまりはわたしのいたらないから……

喜之助。……

おとま。すみません。——堪忍して下さい。（眼を拭く）

喜之助。（嵩にかゝつて）と、いへばいゝのか？——詫びればすむのか？——この期になつてまだそんな……

おとま。ですから、いゝえ、今日いはうか明日いはうか？——でも、さういつたらまアどんなに腹を立てるだらう。——いゝえ、腹を立てるだけならいゝ、それをトツコに、二度とふたゝび逢はないぞ。——さうでもゝしいはれたら……

喜之助。當りまへよ、知れたこつた……

おとま。だからつい一日延びに——（さびしく）一日延びになつたんです……

喜之助。……

おとま。決して、それだつて、いまさらお前を突出すの引出すの。——そんなことのありやうはず

がありません――うそにもそんな――そんなことをいはれるさへわたしは……（再び眼を拭く）

喜之助。（上の空といった感じに）そんならなぜ消した？（……強いことはいってもそれまでは幾らかまだよもやに引かされてゐた。――そこまで來てはつきりそれのほんたうと分つたのから來たいまさらながらの失望。――それだけいひ方に力がない）

おとま。だからこれには。――いろ〳〵これには……

喜之助。（にべもなく――といふことはいつそ捨鉢に）いひわけはたくさんだ。

おとま。（半ば自分にいふやうに）お前に無理をさせまいと思つたばかり。――こんなことになると思へば……

喜之助。……

おとま。喜之さん、口惜しいけどわたし、十兩のお金がなければ身が立たなかつたんです。

喜之助。（强く）何？

おとま、いつか話したお父つあんの病氣がいまにやつぱり思はしくないんです。――それに入るいろいろの、人參の代や何か八兩ほど年をかき入れても都合してくれ。――おつ母さんからさういつて來ました。

喜之助。……（おとまの顏をみる）

おとま。いゝえ、お前にうち明けるのは知つてゐます。――うち明ければ、お前の、身にかへてしてくれるのも知つてゐます。――知つてゐるだけいへません。――初仕舞のあるのにそのうへまた。――お前を大切に思へばわたしにはいへません。

喜之助。おためごかしは止しにしろ。

おとま。さうぢやアありません。――お前はよくつても、でも、お前のうちの首尾があります。

喜之助。……

おとま。（しんみりと）さうでなくつても負けない氣のお前。――わたしは末を案じるから……

喜之助。末を案じりやアいまはどんな眞似をしてもいゝのか？

おとま。（あぐねたやうに）いゝえ、さうぢやアないけど……

喜之助。ざまアみろ。（横を向く）

おとま。その代りには必とこのお前の顏は立てます。

喜之助。ふゝん、だ。

おとま。お前への面ばれに必と藤兵衞をつき出します。

喜之助。藤兵衞？――藤兵衞といふのは新川の……？

おとま。えゝ。

喜之助。逢つたことはないが聞いてはゐる。――其奴のこりやアさりやくか？

おとま。器用に、えゝ、十兩くれたと思へば。――なぜ喜之助の名をうでへ彫つた？……

喜之助。そんなケチな、胸氣なことをいふ奴とは思はなかつた……

おとま。嫌だといへばそれつきりです。――わたしは構はなくつてもお前の名の出たうへは、どんなまた後腐れがお前に、――わたしはそれを思ひました。

喜之助。……

おとま。といふのも女の淺い智慧……でした。――ぶつとも叩くともお前のいゝやうにして下さい。――それでも料簡出來なければ、すつぱり藤兵衛をつきだしたあとで、それこそわたしを突出すともどうともして下さい。――どうされたつてわたしはうらみとは思ひません。

喜之助。……

おとま。お前に突出されて、わたし、どうせ生きてるつもりはありません。――さう思つて――可哀想と思つて堪忍して下さい。

喜之助。……

おとま。ねえ。――ねえ、喜之さん……

喜之助。……

おとま。ねえ。――ねえ……

喜之助。……

おとま、自分にしあんをきめ、のべ紙を裂いて小指を結へ、ついと立つ。

喜之助。どこへ行く？（袂を押へる）

おとま。あ、あすこまで。

喜之助。何しに？

おとま。えゝ、あの……

喜之助。指を切つてどこの淺黄裏にやるんだ？

おとま。……

喜之助。大ていにしろ。

おとま、そのまゝべつたりすわる。

おとま。喜之さん、わたし。――わたし、もう……（泣く）

近くの座敷のいたこ。――かくのだますといはんすけれどわしにかゝれるぬしぢやない……

喜之助。（間。――急に）相手は藤兵衛だ。

おとま。……？（顔を上げる）

喜之助。消した奴より消さした奴だ。

おとま。お前……？

喜之助。（歎息するやうに）……やつぱり駄目だ。

近くの座敷のいたこ。――おまへばかりに苦勞をさせてわしは苦勞をせぬかいな……

（幕）

第二幕

第一場

二川屋の二階。（前まくより一ト月あまりあと）

長五郎をまんなかに、あば鐵、あを吉、おさき松、船頭、娘分、それに男げいしやを加へた大一座。――一しきり大騒ぎのすんだあとで杯をはやらせてゐる。鐵も、松も、吉も、カナリもう醉つてゐる。――長五郎のそばに、おとま、いつそ冷やかなとりなしにそのさまをながめてゐる。

あば鐵。酒を持つて來い、酒だ〳〵……

娘　分。こゝに、お前、ありますわね。

男げいしやの一。えゝ、お杯のおあきはございませんかな、お杯の……

おさき松。さア行くぜ。（杯をなげる）

男げいしやの一。おツと、猪牙で來なさい、にたりは遲い……

男げいしやの二。ふさつても鯛と來た。

あを吉。古い洒落をいふねえ。

男げいしやの一。長さん、お一つ……

長五郎。いけねえ、俺はもう飲めねえ。
男げいしやの一。では、のめんな蒙りましてもう一つ……
娘　分。あつかましいね、この人は。
男げいしやの二。（急に）なんにもいふ人ではないわえ……
男げいしやの三。いよ、紀の國屋ア……
お八重、入つて來る。
お八重。さア、あちらでおあがんなさいまし。
「おツとしよ」とばかり、これにて、鐵、松、吉、みんな立上る。長五郎とおとまとだけ殘して一同
どや〳〵と廊下に出て行く。
船　頭。（廊下から長五郎に）どうなさいます、宵立になさいますか？
お八重。おとまりでせう、今夜は？
長五郎。まだ決めてゐねえ。
お八重。あんなこと。――たまに來て何ですよ。
長五郎。先刻から散々いたしめられた奴よ。（わらふ）
お八重。當りまへですわ、よく道が分つたと思つて。――ねえ、おとまさん……

おとま。聞きながら來たとさ。
長五郎。何だ、手めえまで。――（船頭に）工合にしようぜ。
船　頭。（うなづいて）そんなら……
お八重、船頭、去る。
間。
長五郎。大風のふいたあとのやうだ。――（杯をとつておとまにさす）どうだ、一つ飲まねえか？
おとま。（それをうけとつて）長さん……
長五郎。え〵？
おとま。大さうなこつたね。
長五郎。何が？
おとま。今日のけしきさ。
長五郎。ふん、これしきの工面が出來ねえでどうする？――と、まア、たまにはいふ奴よ。（わらふ）
おとま。……
長五郎。戯談のけて、お前に俺は禮に來たんだ、今日……
おとま。禮に？

長五郎。隨分いま〻でお前には厄介をかけた。世話ア燒かした。――が、喜んでくれ、どうにか俺もうだつが上りさうだ。

おとま。ほんたうかい、お前？

長五郎。こゝんところ暫く出て來なかつたのもありやうはそのためだ。――くはしいこたア追つて話すが、これからはもう決して苦勞はかけねえ。――お前も、だから、そのつもりでゐてくれ。

おとま。（しみ〴〵と）分らないもんだねえ、人つてものは……

長五郎。全くだ。――自分でも、俺ア、夢のやうだ。――このまへ來てお前に無理をいつたときから二タ月とまだ經つちやアゐねえ。

おとま。それより、お前、藤兵衞さんだよ。

長五郎。藤兵衞？――うむ、どうした、彼奴？――相變らずか？

おとま。いゝえ、それが。――たうとう店をかぶつたぢやアないか。

長五郎。新川をか？

おとま。あゝ。

長五郎。いつ？

おとま。先月の末……

長五郎。で、どうしてゐる？

おとま。それは、まア、一番々頭でもしてゐたんだからしがくはついてるけど……

長五郎。それにしても。――（感じ入つたやうに）分らねえものだなア……

おとま。この間も來たとき、とても歸參は出來さうもないから、いつそ自分で見世でも出さうかといつてたけど。――强つ氣で愚癡らしいことをいはないだけわたしア氣兼でね。（歎息するやうに）

長五郎。誰もしかし口をきくものもねえのか？

おとま。店ぢやア、でも、下の者がだん〴〵くり上げて出世するからいつそうれしがつてゐる……

長五郎。よく出來てやアがる。――が、その妄念がみんなお前の體にとツつくんだぜ。（わらふ）

おとま。（さびしく）それを思ふと。――それを思ふと、だから、片時もこのごろこの稼業をしてゐる氣がしなくつて……

長五郎。（外してわざと何のこともないやうに）何だ、そんな氣の弱え……

おとま。それが、いゝえ、藤兵衞さんばかりぢやアないんで。――喜之さんでも、このごろ、親御の首尾を惡くしてわきへどこかあづけられてゐるといふんだもの……

長五郎。其奴は事だな。

おとま。（いかにも思案に盡きたやうに）長さん、わたし、どうしたらいゝだらう？

長五郎。（間。――しんみに）人は落目が肝心だからな……

お八重、廊下に來る。

お八重。おとまさん……

おとま、立つて行く。――お八重、何かさゝやく……

おとま。いゝから好きにさしてお置きよ。（そのまゝすぐ長五郎のそばにかへる）

お八重、あぐねたかほで去る。

おとま。長さん、わたしに飲ましておくれ。

長五郎。はじまつたな。

おとま。いゝえ、いつもの今日は癇癪ぢやアないの。

長五郎。……

おとま。素面ぢやア、わたし、誰のまへにも出られない……

おとま、大きいもので飲む。

第二場

前まく第三場と同じ座敷。――藤兵衛、お八重を相手にくど〳〵いひながら酒を飲んでゐる。

藤兵衛。……いゝか、十六文のつまみ菜を買ふにしたつて十文と六文と二度に買へば量が違ふ。――剝身だつて皿に買ふのは損だ。水をしぼつて目籠で買へば一ト杓子は徳が行くんだ。――ものの利合つてものはさうしたもんだ。

お八重。……（だまつて銚子を火にかざす）

藤兵衛。忘れもしねえ、今年の正月、早がへりの朝だつた。――英鄭の橋をわたると十ばかりの小僧が筒つぽを着ておもたさうに荷を下してゐる。海にはまだ白魚の篝がみえた。もう七つちつとすぎか。――兄イ、その荷は一荷いくらだ？――聞くと、よく賣つて二百がもんだ。――さういふぢやアねえか、思はず俺はホロリとした。――さすがに俺は無常をかんじた……

お八重。……

藤兵衛。それから、俺は、腰の錢入に三百ばかりあつた奴をやらうと思つた。取らねえ。なるほどこりやア尤もだ、そんなら俺がみんな買はうと、その荷を川へ放したら、惜さうな顏をして頂いて持つて行つた……

おとま、入つて來る。――だまつてお八重のそばにすわる。

藤兵衛。（つゞける）げいしやに遣つた一分よりその三百のはうがどんなに生きたか分らねえ。――うれしがられたいゝけだつて大したこつた。――儲けにくいも金なら使ひやすいも金だ。――世の中

といふ奴はだから入我我入。――分つてるやうで分らねえ……

おとま。お八重さん、そんなこと音無しく聞いてるやつがあるもんかね。

お八重。えゝ、でも……

藤兵衛。誰も手めえに聞けとはいはねえ。

おとま。（それにはこたへないでお八重に）有難う、わたしがするわ。

おとま、お八重から銚子をうけとる。――お八重、おとまにまかせて救はれたやうに出て行く。

間。

おとま。つぎませう。（銚子をとる）

藤兵衛。それより、手めえ、いまゝでどこへ行つてゐた？

おとま。えゝ？

藤兵衛。なぜさう喜之助に義理を立てるんだ？

おとま。……

藤兵衛。（嘲るやうに）いくら手めえが隠したつて天道み通しだ。――悪そばえをするだけ無駄だ。

おとま。……

藤兵衛。なぜかくす？――何だつてかくす？――かくすにはさだめし隠すだけの理窟があるだら

う。――それを聞かう。――それを聞かうぢやアねえか？

おとま。……

藤兵衛。手めえ、あの喜之助は、俺に對して疾うにもう突出したんぢやアねえか。――いやさ、あれほど固く、つき出してみせると俺に請合つたんぢやアねえか。――それからもう幾日になる？

おとま。……

藤兵衛。（いきり立つて）なぜつき出さねえ？――何だつてつき出さねえ？――何だつて、まだ、喜之助を呼んでゐやアがるんだ？

おとま。……

藤兵衛。（急にまた嘲るやうに）俺には分つてゐる。――手めえの料簡はよく分つてゐる。――何だらう、手めえ、俺がいま店をかぶつて、一トしきりの藤兵衛でなくなつたのにうつかり彼奴をつき出して、虻蜂とらずになつちやアうまらねえと算盤を取つたんだらう？――それであれまでに絲道のついたものを、たゞ合の手でまじくなひの、べん〳〵だらりと今日まで引ずつて置きやアがつたんだらう？

おとま。（間）藤兵衛さん。

藤兵衛。何だ。

おとま。かくしてゐるのはわたしが惡かつた。——堪忍しておくんなさい。

藤兵衞。（强く）何？

おとま。けど、それにはそれだけの理由があります。——つき出すとお前にうけ合つたそのあとで、喜之さん、親御の首尾をわるくしていまではわきへどこか預けられてゐます……

藤兵衞。だからどうした？

おとま。そこです。——わたしもこの内ぢやア板頭とか何とかいはれてゐます。——人にメドをとられるだけ、喜之さんの、心細く、たよりなくなつてゐるところを、いかに情なし稼業で、嘘を元手のつとめはしてゐても、わたしは、藤兵衞さん、道にはづれたことは出來ません。

藤兵衞。……

おとま。明日にも親御のこゝろが直つて、喜之さんがうちへかへつたといふことを聞いたら、そのときこそ立派にわたしは突出してみせます。——いまそんなことをして、あれでも立引か、何といふ眞似をする女だ。——いゝえ、わたしがいはれる分には何といはれても構ひません、ともどもお前までつぶれたら。——人は、いゝえ、あることないこと必といひます。

藤兵衞。……

おとま。お前でなければ疾うにこのことを話してゐます。——お前だからわざといはなかつた。——それを未練で——わたしの未練で呼んでるやうに思はれちやアわたしの立つ瀬がありません。——これで惡かつたら、わたし、どうでもお前の好きになります。

藤兵衞。それは、手めえ、誰にいふ口だ？——いひたかアねえが、朝は大島町の剝身うりの出端を切ッかけに、日が暮れゝば白魚の簪と一しよに三百六十日、うちに寢る夜を遊びと心えてゐる人間だ——つべこべ悧巧ぶつて何をいやアがる。——人をふみつけにするのも大ていにしろ。

おとま。……

藤兵衞。そつちがさういふ料簡ならこつちにもしようがある。——もう一も二も論はねえ。——所詮腐つた根性つ骨なら、緣を切るとも切らねえともかうなりやア手めえの勝手だ。——義理知らずのふんばりあま、面ア洗つて出直しやアがれ……

間。

おとま。（急に）好ござんす。——これだけいつて聽いてくれないならそれつきりです。——こつちの體さへ覺悟すりやア、面倒なことも、むづかしいことも、怖いこともおそろしいこともありません。——もうなんにも被仰んな。

おとま、手を叩いて呼ぶ。——返事をしてやがてお八重來る。

お八重。お呼びなさいましたか？

おとま。お八重さん、こゝにあるものをみんな階下の八畳へ持つて行つておくれ。

お八重。（耳を疑ふやうに）階下の？

おとま。（はつきりと）喜之さんのゐる隣の座敷さ。

お八重。おとまさん……

おとま。いゝんだよ、分つてるんだよ……

おとま、大きいものでまた立續けに飲む。

……お八重、出て行く。

藤兵衛、冷かにおとまのそのさまをみまもる。

第三場

二川屋の階下ざしき。——喜之助、船頭の忠七を相手に手もちなくすわつてゐる。——酒の道具はならんでゐるが外にだれもゐない……

喜之助。（急に）歸らう。——忠公、歸らう。——すぐ船をこしらへてくれ。（いらつくかたちにきせるをきせる筒にしまひかける）

忠七。お待ちなさい、まア。——いま呼びます。——何をしてゐやアがるんだらう、彼奴らア

（手をたゝく）

喜之助。もういゝ。——呼ばなくつたつていゝ。——先方からよツつかないものを何も……

忠七。いゝえ、呼びます。——いま呼びます。——ふざけやアがつて、畜生……（手をたゝく）

お八重、入つて來る。

お八重。（冷かに）お呼びなさいました？

忠七。お呼びなさいましたぢやアねえ、何をしてゐやアがるんだ。——先刻から呼んでるのが聞えねえのか？

お八重。あら、さうですか？

忠七。あら、さうですか？——何をいやアがる、勝手につけば手めえのはうからべた〳〵よツついて來るくせに……

お八重。……

忠七。おとまさんはどうした、おとまさんは？

お八重。えゝ、いま來ます。

忠七。どんなに忙しいか知らねえが面ぐらゐ出したつて罰はあたるめえ。——どうでも手めえが拔けられなきやア、お仕着どほりの言付で、さびしいだらうが待つてくれとか、げいしやでも呼

んでろとかいつてよこしてもいゝはずだ。——内の奴にしたつて頂くものをいたゞいたときばかりちやほやするのが能ぢやアあるめえ。

喜之助。いゝやな、もう。——そんなことをいつたつてはじまらない……

忠　七。いゝえ、いはなくつちやアくせになります。——けふは懸に出たの、堀の内へ行つたのとお前さんを呼出しちやア、升屋を奢れの、芝居がみてえの。——おとまさんを楯にもうねだり放題の……

喜之助。止せよ、みツともない。——費消つた金が惜しいやうにみえる……

忠　七。でも、あんまりうけとれねえ仕打をしますもの。

お八重。いま、ぢやア、すぐ呼んで來ます。

喜之助。無理をしなくつてもいゝ。——俺はもう——今日はもう俺はかへるから……

お八重。えゝ、さういひます。

お八重、去る。

忠　七。どだい彼奴の面が氣にくはねえ。

喜之助。さういふな。——勘當されたこつちがぶねんなんだ。

忠　七。でも、お前さん……

喜之助。いゝやな、仕方がない……

間。おとま、ふら〳〵と入つて來る。足もとのきまらないほど醉つてゐる。——あとに娘分一人つゐてゐる。

おとま。(座敷へ入ると一しよにべた〳〵とすわる。苦しさうにうつぶしになる。——やがてぼんやり顏を上げる)水をおくれ。——だれでもいゝから持つて來ておくれ。——あの人に飲まされてわたししみじみ醉つた……

喜之助。……(思はず顏の色をかへる)

おとま。誰もゐないのかい?——持つて來ておくれよ、早く。——氣がきかないねえ、ほんたうに……

喜之助　おとま……

おとま。(上の空に)えゝ?

喜之助。何だ、その恰好は?(忠七や娘分のまへを兼ねるこなし)

おとま。(顏をみて)まア喜之さん。——お前まだこゝにゐたの?

喜之助。(思はず)何?

おとま。わたしア、もう、疾うにかへつたものと思つてゐた。

喜之助。それは、おとま、誰にいふ口だ？
おとま。お前にさ。
喜之助。……？
おとま。誰にもいやアしない、お前にさ。
喜之助。（カツとするのをわざとわらつて）大した愛想盡しだ……
おとま。わるかつたわね。——大した愛想盡しで惡かつたわね。（喰つてかゝる）
娘　分。（み兼ねて）おとまさん……
おとま。何だい？——何か用かい？
娘　分。喜之さんに、お前。——いくら醉つてゐるからつて……
おとま。好ぢやアないか。——何をいはうと好ぢやアないか。——よけいなお世話だよ。（ふり拂ふ）
喜之助、いきなりおとまを引倒してめつたうちに打つ。——娘分、驚いてさゝへる。
娘　分。あれ喜之さん、そんな——そんな手荒な……
喜之助。聽かない。——娘分、とても自分の手に終へないとみて「誰か。——誰か來ておくれ」と人を呼ぶ——お八重、娘分たち二三人駈けて來てなかへ割つて入る。
喜之助。（興奮したまゝ）ふ、ふざけやアがつて。——默つてゐりやアいゝ氣になりやがつて……

忠　七。さうですとも。——よく、まア、いまゝで、辛抱しなすつた。——板頭か棒頭か知らねえが、こつちはもう、みてゐてもじり〳〵……
お八重。何だね、忠さん、お前まで一しよになつて……
忠　七。あたりめえだ。——お客に對してふしだらがありやア、船頭は、旦那はおろか親方にまで言譯がねえんだ。——たとへ喜之さんが料簡してもかうなりやア俺がいやだ、この俺が合點しねえ……
娘　分。忠さん、お前。——後生だから……
外の娘分もとも〳〵とめる。
おとま。打捨つてお置きよ、みんな、——どうとも好きにさせるがいゝ……
娘　分。おとまさん、お前も。——お前も、もう……
おとま。いくら體は賣物でも勝手にさうぶたれてすむもんぢやアない。何もからんだ筋ぢやアなし、嫌だから嫌、はつきりさういつたゞけぢやアないか。——それが氣に入らなきやア見立替をするがいゝ。——馴染もへちまもあるもんか……
娘　分。おとまさん……
おとま。いゝぢやアないか——わたしのわがまゝと酒のわるいのは正札附になつてるんだよ。——

ものいひッぷしが悪くつて氣に障つたらたんと障つたがいゝ。——七十五日わるくいはれりやア
それでいゝんだ……

喜之助、ぢッとこのうち自分をおさへてゐる。

喜之助。忠公、行かう……(急に立ちかける)

女たち。喜之さん、そんなことをいはないで。——それぢやアわたしたちがすみません。

喜之助。馬鹿をいへ、このうへゐれば恥の上塗をするばかりだ。——理も非もわからない奴を相手に……(いひかけて)これも親に泣きをみせた罰だらうよ。(忠七、一ト足さきに出て行く)

おとま。(間)喜之さん……

喜之助。何だ?

おとま。縁を切つたら起請を返しておくんなさい。

喜之助。引札どうぜんな紙つ屑。——いはなくつても返してやる……(首にかけた守り袋から二重三重につゝんだ起請を出しておとまのまへに投げだす)

おとま。(とり上げてなかを改めふところに入れる。——そのあと帶に挾んだ紙入から喜之助のはうからとつた起請、おなじく幾重にもつゝんだのを出して)さア、お前のも返しますよ。(喜之助のまへに投げだす)

喜之助。……(とり上げてすぐ引ッ裂かうとする)

おとま。あゝ、それ……(聲をかける)

喜之助。何?(出端をくじかれたかたちに思はずその手を止める)

おとま。(冷かに)相手をめつけてもう一度役に立てるといゝ……

喜之助。な、なにをいやアがる……(そのまゝまるめて袂のなかに入れる。)二度たアもう逢はねえぞ。

(ざしきを出ようとする)

娘 分。喜之さん、それは。——そんな短氣な……(兩方から袂にすがる)——お八重さん、早くお前旦那に……

お八重、急いでざしきを出て行く。

混亂、——ふり切つて、喜之助、出て行く。——娘分二人そのあとを追ふ。

間。

おとま、急に癪をおこす。——殘つた娘分おどろいて介抱する。

娘 分。しつかりして。——しつかりして、おとまさん……

おとま。(苦痛を忍ぶ)大丈夫。——大丈夫……

隣座敷との境界の杉戸のかげに藤兵衞、廊下に長五郎のすがたあらはれる……

(幕)

第三幕

第一場

鳥居町船宿、（前まくのあくる朝）

忠七、仕出しの岡持を下げて外からかへつて來る。——女房おうた、火鉢のそばにすわつて酒の支度をしてゐる。

……外には雪がふつてゐる。

忠　七。（半ば自分にいふやうに）すつかり積りやアがつた……

おうた。昨夜つからふりつゞけだもの。

忠七、上り口に岡持を置く。——足を拭いて土間からあがる。

忠　七。いま、お内儀さん、二川屋の女が來やアしませんか？

おうた。來たよ。

忠　七。投網町でみかけた恰好がよく似てゐると思つた。——お八重の阿魔（あま）でせう？

おうた。あゝ。

忠　七。何てつてました。彼奴？

おうた。何さ、西河岸まで懸廻（かけまはり）に來たから寄つた。——さういつてゐた。

忠　七。で、喜之さんのことは？

おうた。訊いてたよ。——だから昨夜、河岸からすぐお歸んなすつた。——さういつて置いた。

忠　七。（自分に）畜生、さぐりに來やアがつた……

おうた。さういつたよ、でも。——昨夜は藤兵衛さんといふむづかしいお客と落合ひの、おとまさんも酔切つてゐたんで、ひよんな間違ひも出來ました。——よくこなたからさういつて——もう一度來て下さるやうに……

忠　七。彼奴、まア、どこを押しやアそんな音が出るんだ……

おうた。だからわたしもいつたよ。——えゝ、みえたらさういつて上げませう……

忠　七。そんなこつて感じる相手ぢやアありません。——もつと小ツ酷く——ふんづかめえて鼻つ面を……

おうた。（わざと取合はず）お前にもたのんでくれといつてゐたよ。

忠　七。何を？

おうた。喜之さんをつれて來るやうにさ。

忠　七。そ、さういふ——さういふ畜生です……

この應酬のうち、忠七、岡持からとつて來た料理を出す。——おうた、銅壺へちろりを入れたり、鍋を火にかけたり、手鹽皿だの散蓮華だのならべたりする。……

おうた。出來た。——いゝよ……

忠　七。あい……（立つて奥へ行く）

喜之助、ともゞ忠七と出て來る。

おうた。（はれ〳〵と）さア、お燗がつきましたよ。

喜之助。……

おうた。お氣晴しに一つ召上れ——忠公、お前……

忠　七。お一つ上つて御思案どころ。——さア、喜之さん……

喜之助。……

喜之助、力なくすわる。——忠七、すぐさかづきをとつてさす。——おうた、酌をする。間。（……雪の日しん〳〵とした感じ）

喜之助。（無理に一つ二つ飲んだあと重ねてまたつがれたさかづきをそのまゝ下に置いて）親方は？

おうた。一寸いま鷹橋まで出かけました。

喜之助。この降るのに？

おうた。えゝ、帝釋講の寄合で……

喜之助。帝釋講？（床にかけた帝釋天の懸物へこなし）——大へんだね、それは……

おうた。あんなガラ〳〵した人が、信心のことつていふと、何を措いても夢中になるんですから可笑しくつて……

喜之助。……

おうた。そろ〳〵もうお鍋の方もようございますよ。（火の加減を見る）

喜之助。（それにはこたへず。——思ひ入つたさまに）俺も早く信心でもすればよかつた……

おうた。（顏を上げてわらふ）何を、あなた。——いまからそんな……

喜之助。（それをうけつけず。——きはめて心弱く）さうでもしてゐたら昨夜のやうな赤つ恥も……

忠　七。いたゞきませう。一つ……（手を出す）

喜之助。（さかづきをあけて忠七にやる）……いまも、奥の、炬燵のなかでつく〴〵俺ア考へた。——考へりやア考へるほど不孝の報が怖しくなつた……

おうた。

忠　七。……

喜之助。平生から親の意見を上の空に、慈悲があまればあまるほど内にゐるのがうるさくなつた…

…だまされるとも知らず畜生のやうな奴にのろくなつた……何といふ罰あたりだ。（眼を拭く）

おうた。それは、まア。——さういへばさうですけど。——これにはしかし……（いたはるやうに喜之助の顏をみる）

喜之助。……

おうた。何かこれは。——何か、まア、これには……（忠七をかへりみて）ねえ、さう思はないか、お前……？

忠七。（うべなへないかほで）へえ。——それは、まア……

喜之助。（おうたに）さういつてくれるのは有難いけれど。——みす〳〵、でも。——みす〳〵起請まで……

忠七。（その尾について）そ、それなんで。——充滿坪の煤掃するやうに、あくたもくたをまき出したあげくが起請を返せ。——そんな、お前さん……

おうた。（喜之助に）で、その起請。

喜之助。（幾らかの興奮をもつて）だから、そんな紙つ屑、すぐに叩ツ返した……

おうた。いゝえ、さきの。——おとまさんの……？

喜之助。うけとつてすぐみるまへで。——みるまへで引ツ裂かうとした。——と、どうだ？——相手をめつけてもう一度役に立てろ……

忠七。さういふことをいやアがるんです。——どこまでいけツ太いか……

おうた。（喜之助に）で、それ？

喜之助。さういはれて、お前のまへだが……（しを〳〵と）引ツ裂いたつて譽め手はなし……

おうた。……？

喜之助。口惜しいが持つてかへつた。（袂をさぐつて前まくのまるめたまゝの起請をつかみ出す）

おうた。わたしに、それ……（手を出す）

喜之助。こんなもの……（てれかくしを交へてさびしくわらふ）

おうた。いゝえ、こんなものでも。——一寸わたしに……

喜之助。たゞいまのお笑ひ草。——そつちの火鉢へくべてくれ……（投出す）

おうた、取上げる。——擴げて上の包をあけると中からみす紙五六枚に紅筆で書いたおとまの文出て來る。——このうち、喜之助、一つ二つ飲む。

おうた。おや、これは？

喜之助。……？（顏を上げる）

おうた。手紙ですわ、これ……

喜之助。手紙？

おうた。……用事のみしめしり〳〵さてとよこよひのことといち〳〵御はらだちのお心のほど……

（讀みかけて忠七に）讀んで御覽、お前……

忠　七。へえ。――（うけとつて讀む）……御はらだちのお心のほどかね〴〵かくごのまへに御座候――このわけ――このわけ合か――このわけ合はどうも〳〵まをしわけもなき事ながら、少々あ……や……のあることゝ幾……幾重にもおさつし下されたく、くどうは申さず候まゝ。――いま一たび御腹立を御かんにん被成……なされ候て何とぞ……何とぞ……

（忠七、辛うじて讀む）

喜之助。みせてくれ、俺に……

おうた、ちろりを下に置き、忠七からそれをうけとつて喜之助にわたす。

喜之助。（讀む）……何とぞ〳〵この所書のもとへ一寸御はこばせ願り〳〵。とてもこなたへは御入らせもあるまじく、また忠どの事もきつくはら立のやうすにさつしり〳〵。これとても無理ならず候たゞ何事も申譯のかず〳〵御めもじのうへにて、めんぼくもなく御はづかしく存ながらも此わけ一通りを申上たく候へば、何とぞ〳〵書添のところまで御入らせかならずかならず御まち下され候やうねがひ上り〳〵。そのうへにてかれこれともにすぢの立候事に御座候。氣づよき女と思召のほどいくへにも御はづかしく、たゞ〳〵思ふにまかせぬ身にし候へばしみ〳〵じれつたく、心のうちにてふさぎをり〳〵。――しんにけがらはしきちくしやうとも思召して一たび御立歸りのうへならばくはしく〳〵わが身むねのうちお明し申上げたくそれのみねんじり〳〵。――わからぬ奴と御つもらせもあらんなれど、かやうにまでも申上候へば、ぜひ〳〵一たびは御かへらせ神かけていのり〳〵。――筆するゑながら此わけを忠どのへも鳥居町の八五郎さまおかもじさまへもよしなに御申わけ下されかし。――申上げたき御事もこの中にて候へばあら〳〵しめしり〳〵……

誰も無言。

間。

おうた。（いつそ嘆息するやうに）こんなことだらうと思ひました。

喜之助。……（うつむく）

忠　七。で、その來てくれろといふさきは？

喜之助。七軒堀と書いてある……

忠　七。七軒堀？

おうた。と、いふのは、たしか、おとまさんの親御のところ……

喜之助。え〵？

忠　七。（あぐねたやうに）此奴ア、喜之さん、思案をかへなきやアなりませんね。

喜之助。と、いつていまさら……

おうた。（急に）喜之さん、お願ひ――これは行つて上げて下さい……

喜之助。……

おうた。行つてよくそのわけ合を聞いたうへ。――そのうへで切れるともわかれるとも――濟すましはいくらでも出來ます……

喜之助。……

おうた。突出すと見せてかういふ手紙を仕込んだおとまさんの胸のうち。――その胸のうちを、喜之さん、察しないといふこたアありません。――それも昨日や今日の仲なら知らないこと。――いまゝで二年あまりも馴染んで來たおとまさんがそれぢやアあんまり可哀想です……

問。

喜之助。（うなづく）……お前のいふこつた。――行くとしよう。

おうた。行つておくんなさいますか？

喜之助。すぐに行く。――忠公、羽織を持つて來てくれ。

忠　七。承知……

忠七、立ちかける。――途端おもてから、長五郎、ついと入つて來る。

長五郎。それには及ばねえ。――來ようが遲えから俺のはうから出て來た……

忠　七。（驚いて）おめえは……

長五郎。長五郎だ。――まんざら知らねえ面でもあるめえ。――御免よ……

長五郎、樽はず上へあがる。――喜之助、おうた、忠七、不意をうたれたかたちに、茫然とたゞ、思ひもよらないこの闖入者をみまもる。……

長五郎。喜之さんといふのはお前だね？

喜之助。（わづかに自分を取返して）わたしさ。

長五郎。お前のはうぢやアどうか知らねえが、俺のはうぢやアお前をよく知つてゐる。――そのつもりで、まア、このさき附合つてくんねえ……

喜之助。……

長五郎。早速だが、お前に、不承してもらひてえことがあつておとまのうちまで呼出しをかけたんだ――が、吾妻つ子だ、氣が短けえ。――いつまでべん〳〵と待つちやアゐられねえから出て來た。――有難えわけのものと思ひねえ……

喜之助。……

長五郎。聞けば、お前も、おとまとは長え附合ださうだが、あの女とは俺は、三年この方の深え馴染だ。――友だちや子分の奴らにものろく思はれるほどだから、ぜツぴ女房にしねえぢやア組合へも面が立たねえ。――と思ふ矢先、念がとゞいて、ひよんなことから急に今度、俺のところへ來ることになつたんだ……

喜之助。……(顏のいろ變る)

長五郎。喜之さんにはいろ〳〵世話になつた、だんまりぢやア義理が悪い。――おとまの折角いふもんだ。――器用にこゝでおとまを俺にくんねえ。――えゝ？――何があつても苦情はねえとはツきり一ト言いつてくんねえ……

喜之助。(絶望的に)どうとも好きにするがいゝのさ。

長五郎。どうとも好きに？――(どなる)ふざけるな、はツつけ奴……

喜之助。……

長五郎。下から出りやアつけ上つて好きにしろたア何て言草だ。――よぢくれたことをいふねえ。――土臺その高慢が氣にくはねえんだ……

喜之助。……

長五郎。こつちはしんの話合をするんだ。――男づくの口をきくんだ。――それを何だ。――それを手めえは何だ。――手めえのはうでさう出るなら、これからアもうおとまの體に指もさゝせるこつちやアねえからさう思へ。――(冷かにわらつて)此方はの、いさくさなしに兩親ならべ、駄斗水引でもらつたんだ。――腕づくでもなけりやアみゝづくでもねえんだ……

このうち始終、おうた、忠七、いろ〳〵氣を採むこなし。――が、長五郎まくし立てゝつけ入る隙をみせない。

間。

喜之助、ついと立つ。

長五郎。待て、どこへ行くんだ？

喜之助。多、多寡があそびのうりもの買ひもの。――あとから上つたのが此方のふせうさ。

長五郎。(うなづくやうに)うん、よくいつた。――さ、これをみねえ……(手早くふところから書いたものを出して喜之助のまへになげ出す)

おうた、とり上げる。

おうた。(眼を觸れたまゝを)……また〳〵一寸しめしり〳〵。――これはおとまさんの……？

長五郎。いゝからさきを讀んでみねえ。

おうた。(あたりのその歪んだ感じの雰圍氣をみてとる。――讀む)……昨夜、御まへさまおんかへらせ

のあとにて、長さまと、とくしんづくにてうつくしく切れ申候……

おうたをはじめ、喜之助、忠七、驚いて長五郎をみる。

長五郎、無言。

おうた。（間。——讀みつゞける）……くはしきわけは長さまよりお聞き下されたく候。——昨夜藤兵衛にせかれてつき出し申候やうなることにて、さぞかし御はらたちもあらんなれど、御まへさまの男をつぶして男を立てさせ申候いたしかたおん目にかけたく、藤兵衛を山までつれ出しまゐり居候まゝ、長さまことを少しもおうたがひなく耶摩本まで早々おん出待上り〳〵めでたくかしく……

おうた、喜之助、忠七、茫然とまた無言。

長五郎。（居住ひを直して）喜之さん、お内儀さん、忠七さん、とんだ茶番をお目にかけました。——が、そこに書いてある通り昨夜つきりでおとまとわつちやアわかれました……

おうた。

喜之助。

忠　七。

……

長五郎。隨分いまゝでおとまには苦勞をかけました。——いふ目の出るのをいゝことに、苦しい勤

めのなかゝら、阿漕に貢がせもすりやアいたぶりもしました。——おはづかしいが、いまの時世は、いつそ夫を野郎の甲斐性ぐれえに思つてゐました。——ふツつりその眼がさめました……

おうた。

喜之助。

忠　七。

……

長五郎。といふのが、今度、餓鬼の時分からわつちを手鹽にかけて面倒を見てくれた親方が長の患ひで死にました。——今はの際にわつちを枕もとへ呼んで、長、手めえはいゝ男だ、世間で何といはうと俺アさう思ふ。たゞ疵は酒だ。酒を飲むから遊びにも陷る。——後生だから止めてくれ。——手めえの身狀さへよくなれば、俺のあとをそつくり手めえにまかして、安心して俺ア眼がつぶれる——と、さういはれたのが身に沁みました。——しみ〴〵わつちの身に沁みました。——そこで、喜之さん、わつちは酒と遊びを金毘羅さまへ斷たうと決めました。

おうた。

喜之助。

忠　七。

……

長五郎。さうなると心がゝりはおとまです。——いまゝで痛めつけた罪ほろぼしには、どうぞして

たしかな人の手につけてえ。――これとみとめのついた人に世話をたのみてえ。――さう思つておとまの料簡も聞きました。――おとまは、もし、心の底からお前をたよりにしてゐます……

喜之助。……

長五郎。昨夜のしうちも、おとまにすると、つまりは藤兵衛をつき出してえため。――といふのも藤兵衛には、新子のときから世話になつた義理があります。――それを枷に、彼奴がまた、始終おとまにあかぬけのしねえ無理ばかりいひます。――店をかぶつたせうがに年季をぬき、世帯でも持たうといふことになつた日には、一生おとまの浮ぶ瀬がなくなります。――が、昨夜でその義理も返りました……

喜之助。……

長五郎。(いまさら恰好がつかないやうに)とんだ茶番の、けんのみでぶつかつたのも、いへば喜之さんの氣を引くため……とでも、まア。――すみません、堪忍してやつておくんなせえ。――堪忍してどうぞおとまをみ捨てないでやつておくんなせえ。――おとまの奴、彼奴、あんなきかねえ氣のやうにみえて、大根(おほね)はごくの、いくぢのねえ、素直な可哀想な女です。――情のあんなさるのをみ込んでおたのん申します。

喜之助、夢みごゝちに無言、

間。

おうた。長さん、さうしてこの耶摩本といふのは?

長五郎。昨夜の返報に藤兵衛の面をふむ魂膽がしてあります。

おうた。ぢやアおとまさんは……

長五郎。喜之さんとわつちの行くのを、いまごろもう、そこで首を長くして待つてゐませう。

忠七。それだつたら、喜之さん……(立つ)

おうた。(忠七に)すぐに支度をしな……

忠七。おツと……(そのまゝ土間へ下りる)

喜之助の眼から急に泪が溢れる……

喜之助。長さん、一つ飲んで下さい。(さかづきをあけてさす)

長五郎。……有難う。(さそはれて不覺に泪ぐむ)

おうた、酌をする。

忠七。いゝ鹽梅に小止みになりやアがつた……(櫓をかつぎ出す)

第二場

二タ間つゞきの座敷の廣いはうに、藤兵衞と、おとまを眞ん中にして、お八重、船頭、げいしや、男げいしや、わけもなく大ぜい夢中で拳をうつたりしてゐる。——十二分にもう酒はまはつてゐる。

藤兵衞。もつと騒げ、もつと騒げ……

男げいしやの一。さア、ぢやア、今度は惣踊りだ。

男げいしやの二。女どもゝ立つた〳〵。

男げいしや、無理にげいしやたちを立たせようとする。

おとま。不機嫌で）止しとくれ。——血の道がおこらア……

げいしやの一。そらおとまさんが騒ぐなといふぢやアないか。

げいしやの二。大ていにしてお置きよ。

一座急に白ける。

男げいしやの一。さアいけねえ。——女どもは騒がねえとよ。

男げいしやの二。藤さんは騒げといふ、おとまさんは騒ぐなといふ。——此奴アよつぽどむづかしい……

男げいしやの一。誰かいゝ智慧はねえか？

男げいしやの三。うちへ行つてかゝアに聞いて來べえ。

男げいしやの四。何をいやアがる。

お八重。いさくさなしにお酒としたら……？

男げいしやの一。（頓狂に）お酒？——（膝を打つて）さうだ、お酒……

男げいしやの二。そのこと〳〵……

船頭。やつといゝ智慧が出やアがつた。

藤兵衞とおとまを除いた外のものみんな笑ふ。

男げいしやの一。酒だ〳〵……（無上に手を叩く）

女中、いそがしく銚子を運んで來る。——みんな景氣よくさかづきをまはす。——が、白けた一座の空氣は決してそれによつて救はれない……

間。

藤兵衞。おとま、飲みねえ。（吸物椀の蓋をとつておとまのまへに出す）

おとま。わたしやア今日からお酒は斷つたといふのが分らないの？

藤兵衞。誰に斷つてたつた？

おとま。誰にでもない、自分にさ。

藤兵衞。（冷かにわらふ）さうか。――おとまは飲まねえといふから俺が飲む。――誰でもいゝ注いでくれ……

そばにゐたげいしや急に酌をする。

藤兵衞。（一ト口飲んで下へ置く。――一座をみまはして）手めえたちはどう思ふか知らねえが、色男きどりで遊ぶ奴が俺は大嫌えだ。――たとへていやア蛞蝓（なめくじ）だ。

男げいしやの一。なぜでございます？

藤兵衞。さうぢやアねえか、色さへ生ッ白けりやアいゝかと思ひ、手も足もねえくせに光りたがる――銭を出すにも目鼻があかねえ。――むめんもくなところが何と蛞蝓だらう。

男げいしやの二。そんなお客は鹽花をふるに限ります。

藤兵衞。そのまた蛞蝓をのみたがる蛙のやうな奴があるものよ。

男げいしやの三。はて？

藤兵衞。蟇（ひきがへる）といふ奴は中つ腹で飛び出したがるが、銭がねえからたゞまじ〳〵とグウの音も出ねえ。

男げいしやの一。
おなじく　二。……
おなじく　三。

藤兵衞。と、また、生殺しの蛇といふ女郎があるのよ。――ためになる客は袖にしてぬらくら穴つ入りばかりしたがる。――蛙は蛇にのまれてゐると知らず、蛇は蛞蝓にとけると知らねえ。――なんとべら棒ぢやアねえか？

藤兵衞、一座をみまはす。――とつさに誰も無言。

おとま、吸物椀をあけていきなりお八重のまへに出す。

おとま。ついでおくれ。

お八重。まアそれで？

おとま。いゝからついでおくれ。

お八重、つぐ。――おとま、一ト呼吸（いき）にのんで藤兵衞のまへに出す。

藤兵衞。（冷かに）何だ、あやまるのか？

おとま。藤さん、飲んで下さい。

藤兵衞。いゝえ。

おとま。あやまらないおさかづきさ。

藤兵衞。ぢやア何だ？

藤兵衞。何？

おとま。昨夜、お前の顔を立てゝ、喜之さんをつき出したらそれでいゝぢやアないか。――それをまだぐづ〳〵いふのは店衆のあくがぬけないからだ。――さういはれるのも、わたしのやうな情のない、いつこくなものになじんだお前の不運さ。――わたしやア、もう、今日といふ今日は愛想が盡きた。――わたしのはうからおさらばさ。――さう思つておくんなさい。

おとま、ついと立つ。――藤兵衛、矢庭におとまの帶をつかんで引倒す。

一座のものみんな思はず立上る。――が、藤兵衛のけんまくにのまれてどうすることも出來ない。

藤兵衛。何をいやアがる、ふんばり奴。――昨日俺にいぢめころされ、よんどころなく喜之助をつき出した手めえのさりやくを俺が知らねえと思ふのか？――ろくでもねえ智慧をふるつて、手めえたちがいかほど相場をくるはせようと、それに乘つて買込むやうなそんな藤兵衛ぢやアねえ。――働きのねえその面で板頭がすさまじい。――垢の入つた腐れ緣、俺にはもう未練はねえ、手めえがいはずと切れてやる。――藤兵衛は、さア、切れてやる。……

藤兵衛、矢立を出しておとまの腕に二人命と書く。

藤兵衛。お八重……（目まぜする）

お八重、立つて隣座敷との間の唐紙をあける。――と、そこに、喜之助、長五郎、忠七の三人ゐる。

藤兵衛。（闕越しに）喜之助さん、長五郎さん、いまゝで二川屋で落合ひましても、あぢなもので御挨

拶も申しませんでした。改めていまお近づきになります。

喜之助。
長五郎。……（顏をみ合せる）

藤兵衛。さて喜之助さん、昨夜おとまの氣を引いたところ、よもやと思つたお前を乘切つてつき出しました。――しくじつてゐる藤兵衛を立てゝくれたのはかたじけないが、さういふ無理をしたからは、必とその返報はあるものと覺悟はしてをりました。――が、いまおとまと切れたのはわたくしも親方へ歸參がかなひました。

喜之助。
長五郎。……

藤兵衛。店へまたもどれた上は、二度ともう二川屋へ足ぶみはいたしません。――稼業大事、親方大事、これからはもう生れかはつた料簡で、いまゝでのとりもどし、身を粉にして働きます。――といふのも、わたくしも、來年はもう四十。――と自分にさう氣がついちやア一日だつて馬鹿はつくせません。――おとまのこともふツつり思ひ切りました。

喜之助。
長五郎。……

藤兵衞。おとまの腕の彫ものを消したことも、いまがいまゝでの惡態も、それもこれもおとまのいまいつた店もの〻野暮。——手代敵の持ちまへと、わらつてどうぞ堪忍して下さいまし。——長五郎さん、とも〳〵お前にもたのみます。

間。

長五郎。さすがは大家の御支配人、さつぱりとしたおさばきだ。——いかにもわつちは承知した。

藤兵衞。それで大きに安心しました。

長五郎。が、出入いさくさなしにすんだ上は、おとまの腕の、二人命のこの一本は改めてこゝでわつちが消します。(手拭でふきとる)——さ、かうすれば一人命……(その手をそのまゝ喜之助の膝へつきやる)——藤兵衞さん、わつちも仔細あつて昨夜でおとまとすつぱりわかれました。

藤兵衞。え〻？

長五郎。おとまの行末を改めてわつちは喜之さんにあづけました。

一座、啞然とする。——喜之助、面目なげに上氣してうつむく。

間。

藤兵衞、手を叩いて女中を呼ぶ。——女中、出て來る。

藤兵衞。あつちの座敷の支度はい〻か？

女　中。よろしうございます。

藤兵衞。これが藤兵衞の遊び納め。——喜之助さん。長五郎さん、どうぞ附合つてやつて下さい……(立上る)

おとま、急に聲を立て〻泣く。——お八重をはじめ、げいしや、男げいしや、みんなそのそばへよる。

藤兵衞、長五郎、ぼんやり顏をみ交す。——いへば「離れゆく」もの〻さびしさをおの〳〵の身うちに感じながら……

長五郎。畜生、またふつて來やアがつた……(窓の外のふる雪に眼をそらす)

(幕)

(十五年八月)

大寺學校

人物

大寺三平　大寺代用小學校長（六十一二）。
峰　一郎　同　高等科受持の先生（二十六七）。
光長正弘　同　尋常科受持の先生（五十八九）。
玉守久一　同　新任の先生（二十八九）。
高桑虎夫　祝賀會發起人（學生）。
佐々木善吉　同
岩田　清　同
たか子　校長の姪（二十四五）。
お　久　たか子の裁縫の弟子。
おあき　同
おくめ　同
おたま　同
おさと　同

おゆき　生徒の一人。
外に、岩井屋（古着屋の若主人）片倉（骨董屋の若主人）しん馬（落語家）祝賀會來會者大ぜい。

時代

明治の末

場所

東京淺草

第一幕

第一場

大寺學校の教場。——といつても、町中の、あたりまへのうちを二三げんつぶして無理からさうした恰好にした古い建物の一部。十月上旬の曇つた午後。——退けてもうみんなかへつたあと。——當番のものだけ三四人殘つて掃除をしてゐる。

峰、階下から上つて來る。

峰。出來たか、掃除？

生徒の一人。もう少しです。

峰。遊んでないで早くやんなさい。

峰、そのまゝそこに立つ。——黑板の惡戯がきを消したりする……やゝ長き間。

……掃除、すむ。

峰。すんだら歸つていゝ。

生徒たち、箒や塵拂をしまつしたり開けッぴろげたはうゝの窓を閉めたりする。

光　長。（階下から上つて來る）峰先生……

峰。……？（ふり返る）

光　長。何とも昨日は。——相濟みません、毎度……

峰。何でしたつけか？

光　長。いゝえ、わたくしが早くもどつたので。——あとの稽古をまたあなたに……

峰。あゝ。——いゝえ、お易い御用です。（わらふ）

光　長。毎々、ほんたうに御厄介ばかりかけます。（眼をショボ〳〵させる）

峰。それよりいかゞです、御病人は？

光　長。有難う存じます。——何分にもこの陽氣で……

峰。いけませんか？

光　長。（ほと〳〵したやうに）どうも、その。——因果なそのやまひでして……

……かへりかけた生徒たち、包をかゝへたまゝ、二人のそのさまを不思議さうにみて立つ。

峰。何をみてゐるんだ、お前たちは？

生徒たち、狼狽てゝ階下へ行く。

峰。お幾つにおなりです、奥さん？
光　長。七になります。
峰。と？
光　長。いゝえ、四十七に……
峰。お若いんですな、まだ？
光　長。（それにはこたへず。――嘆息するやうに）今年でちやうど九年になります……
峰。九年……？
光　長。いゝえ、三十九の秋はじめて患ひつきまして……
峰。で、その間、始終おやすみになつたきり――といふわけでも……？
光　長。いゝえ、いつそ夫でゐてくれるとまた始末も好いんですが。――なまじ容體にさしひきのあるだけ。――工合のよいときにはあたりまへの體とかはりません。――話をしても分りますし、子供の世話もしてくれますし。――それこそわたくしが少々無理なことを申しても、その無理を默つてわたくしに通させてくれます……
峰。……（うなづく）
光　長。やまひがきざして來るとそれが。――一朝さうなるとそれが何もかも分らなくなります。

――子供の見界もつかなくなります。――誰でもそばにゐるものに喰つてかゝります。
峰。……
光　長。實際。――實際もう恥をお話しなければ分りませんが……
峰。つまりヒステリイの……
光　長。そ、さうなんで。――それの强いんで……
峰。さういふとき、何とかそれを押へることは出來ないものなんですか？――たとへば、まア、さういつたときの何か藥とか。――または、まア……
光　長。さうなると、いえ、藥といふものを一切飲みません。――何といつても强情を張つて飲みません。――押していへば毒をのませて自分を殺すのかと一層猛り立ちます……
峰。なるほど、そんな風ぢやア……
光　長。いろ〳〵人がいつてくれますので、お加持もやつてみました、祈禱もしてみました。――いろ〳〵信心もしてみましたが、どうもさて、これといふげんが一向みえません。
峰。……
光　長。お醫者も、ありやうは、手のつけようがないといつてゐるので。――氣長に、まア、わきでよく面倒をみる外はない。――さうするよりみちはない。――なまじのことをして、この上や

まひを慕らせたら、それこそ取返しがつかない。――さういひますので……

峰。……

光　長。（急に）どうも、これは。――とんだこれは愚痴をお聞かせいたして……（さびしくわらふ）

峰。いゝえ。

光　長。ついどうもお心やすだてに。――年甲斐もなく。――相濟みません……

峰。（しみ〴〵と）お大ていぢやアありませんなア、しかし……

光　長。（さそはれてしみ〴〵と）有難う存じます。――これも、いえ、前生からの約束と思へば……

峰。……

光　長。（階下へこなし。――聲をやゝ落して）これは、しかし、どうぞこゝだけのお話にねがひます。――校長にも、たか子さんにも、かうした深いことはまだ……

峰。大丈夫です、それは。――決してそんなよけいなことは……

光　長。あなたゞけ。――全くこんなお話し出來るのはあなたゞけで……

峰。それよりも、先生。――さういふことだと、おうちの方がみなさん、あなたのお歸りを待つておるでゞせう。

光　長。それは、もう、わたくしの出たあとは子供ばかりなんで……

峰。でしたら、少しでも早くおかへりになつたら……？

光　長。いえ、それがその――實は、今朝ほども、そんなこんなで出て來るのが遲れまして。――校長と、まだ、ほんたうに顏を合せてをらないので……

峰。そんなこと、あなた、どうだつていゝぢやアありませんか？

光　長。いえ、でも……

峰。よけいな御斟酌ですよ、それは。

光　長。しかし……

峰。かまやアしません。――もし何とかいつたらわたしから校長にさういひます。

光　長。尤も、昨夜電報をうつて置きましたから、奉公さきからいまごろ上の娘が歸つてまゐつてゐるだらうと思ひます。――それさへ歸つて來てくれゝば……

峰。それにしたつて、あなた、早くおかへりになるに越したことはないでせう。

光　長。それは、まア……

峰。清書の直しがあつて、今日はまだ、わたしはかへれません。――ずつと殘ります。――だから何かあれば代りはして置きます。

光　長。では、まア。――とにかく挨拶だけでもいたして……

峰。えゝ。

光　長。いろ〳〵どうも。——相濟みません……

光長、階下へ行く。——猫背の、さうでなくてもまるい背中をよけいまるくしながら……

間。

峰、机のそばに椅子をよせ、抽斗から埃だらけのインクに筆を出す。——片つ方の抽斗からは毛繻子の風呂敷につゝんだ圓畫の清書を出す。

……露地の下で、飴屋、チャルメラをふきはじめる。——その、しづかな、泪ぐましい、あてどのない音いろ。

間。

峰、筆にインクをふくます。——清書を直しはじめる。

おゆき。（密と下から上つて來る）先生……

峰。（顏を上げて）何だ、おゆきか？

おゆき。えゝ。

峰。何か用か？

おゆき。あのウ、お座の中に忘れたものがあるんですけど……

峰。忘れもの？

おゆき。えゝ

峰。何を忘れた？——お手玉か？

おゆき。いゝえ。

峰。毬か？

おゆき。いゝえ。

峰。何だ？

おゆき。……（わらふ）

峰。いゝから持つて行きなさい。

おゆき、いそいで自分の机のそばによる。——蓋をあけて毛絲の編みかけを出し、峰にみえないやうに手早く袂の中に入れる。

峰。お洒落をしてどこかへ行くのか？

おゆき。えゝ。

峰。どこへ行く？

おゆき。觀音さまへ。

峰。觀音さまへ行くのに、いち〳〵そんな、いゝ着物を着替へて行くのか？
おゆき。でも、今日は。——今日は菊市ですから……
峰。菊市？
おゆき。えゝ。
峰。それで、今朝、雷門の近所を、菊をもつた人が大ぜいあるいてゐたんだな。——どうするんだ、あの菊？
おゆき。上げるんです。
峰。上げる？
おゆき。上げてべつのを觀音さまからいたゞいて來るんです。
峰。いたゞいて來てどうするんだ？
おゆき。頭痛のおまじなひになるんです。
峰。お前、頭痛もちか？
おゆき。いゝえ、あたしぢやアないんです。
峰。誰と行くんだ？——姉さんとか？
おゆき。いゝえ。

峰。おつ母さんとか？
おゆき。えゝ。——姉さんは加減が悪いんです。
峰。加減が悪い？——またか？
おゆき。えゝ。
峰。どうしたんだ、お前のところの姉さんは？——始終このごろ體ばかり悪いぢやアないか？
おゆき。えゝ……（顏に暗いかげ掠める）
峰。よつぽど悪いのか？
おゆき。いゝえ、そんなぢやアないんです……

……チヤルメラの音。

大寺校長、階下から上つて來る。——袴を脱いだあとで幅の廣い帶をぐる〳〵卷にしてゐる。

校長。峰君……
峰。……？（向く）
校長。御苦勞さま、遲くまで……
峰。（どつちかといへば無愛想に）いゝえ。
校長。……

峰。（さきをくゞるかたちに）何か御用ですか？
校　長。ちよつと君に……
峰。それでしたらお呼び下されば……
校　長。いや、それほどの……
峰。……
校　長。すこし君にお願ひがあつてね……

校長、おゆきのはうをみる、――おゆき、そのまへに階下へ下りてゐる。
チャルメラの音、遠ざかる。
間。

校　長。實は野上のことだが……
峰。え、。
校　長。何か、あの子供、昨日稽古中にしくじりをやつたさうだが……
峰。校長のまへですが、あんな強情な、わがまゝな、素直でない子供もありません。――一度いつか思ひきりいつてやらうと思つてゐました。――ちやうどいゝ機會でしたから……
校　長。何をしかし……？

峰。いゝえ、事件そのものはつまらないことで、わたしの一寸階下に下りた間、隣の席の田宮とただ喧嘩をしたにすぎないんですが……？
校　長。何でしかし……？
峰。いゝえ、何でといふほどのこともないんで、田宮のもつてるものを野上がみせろといふ、田宮が嫌だといふ。――それがもとでぶつたとか抓つたとか。――結局田宮を泣かしてしまつたので……
校　長。で？
峰。それから二人を殘して小言をいひました。――が、いへば、田宮のはうにつみはありません。――ことは野上一人のうへにあります。――田宮をさきに返し、一人にして、それからまた一時間ほどはツきりいつて聽かせました。
校　長。……
峰。（いかにもさう感じたやうに）驚きました、しかし。――驚いたよりもあきれました。――それほどいつても、何とさういつても、決して返辭といふものをしません。――口を結んだなり、それこそ、泪一つこぼしません。
校　長。……
峰。大てい腹が立ちました。――思はず大きな聲も出しました。――が、それでも默つてゐます。

――默つて、ぢッと、しまひには反抗するやうにこつちの顏を睨めつけます。

校　長。……

峰。微塵も子供らしいところがありません。――子供らしい可愛げといふものが全くありません。――畢竟は横着。何をしてもいゝ、何をしたつて大丈夫だ。――多寡をさうくゝつてゐるのがありありみえます。――（わざと）どういふ理由か知りませんが？

校　長。……

峰。が、あゝいふ子供のゐることは外の子供たちに決していゝ影響を與へません。――何とか、これは……？

校　長。いえ、それは。――それはわたしもかねゞ心配してゐる。――何とかしたいと思つてゐる……

峰。……

校　長。何としても、しかし、うちで我儘一杯にさせて置くもので……

峰。……

校　長。いえ、實は。――昨日のことについても。――それについても昨夜、わたしのところへさういつて來た……

峰。何と……？

校　長。それが、いゝえ、當人うちへ泣いてかへつたのださうで。――いくらだましてもだまらない、わけを聞いてもいはない。――何かいへばいふほど嵩にかゝつて泣く……

峰。そ、さういふ子供です……

校　長。で、まア、いろ〳〵にしてやツと口をあかせると、友だちと喧嘩をして殘された。先方もわるいのに、先生、先方は叱らないで自分ばかり叱つた。先生は自分を憎んでゐる……

峰。憎んではゐません。――憎んではゐませんが……

校　長。いゝえ、まア、當人がさういつた。――そのくらゐなことあの子供ならいひ兼ねない……

峰。……

校　長。で、さきのいふのに……

峰。一體だれが來たんですか、そんなことをいつて？

校　長。母親が自身に出向いて來た……

峰。あの「魚吉」のかみさんがですか？

校　長。さうなんだ。――それでこまつた……

峰。……

校　長。君は、まア、御存じあるまいが、一本氣の、感情の強い。――一旦かうと自分に思ひ込んだら人のいふことなんぞ耳にもかけない。――さういつた質の……

峰。……

校　長。だから、それは違ふ、それはさうぢやアないと此方で理合をいつても、あとでは分る、が、そのときには決して飲込まない。――それにいつもこまる……

峰。……

校　長。といつて決してわるい人ぢやアない。――勝氣な、親切な。――そこは江戸ッ子だから……

峰。（遮るやうに）で、さきで、何といふんですか？

校　長。いゝえ、それが、當人がいやだといふから氣髓にさせる。――當分氣のすむまでやすませるから。――と、まア、さういふんだが……

峰。（冷かに）そんことだらうと思ひました。

校　長。え？

峰。いゝえ。今日、あの子供、缺席でしたから……

校　長。（やゝいひ兼るやうに）で、一つ。――そこで一つお願ひがあるんだが……

峰。何でせうか？

校　長。と、さう改まつていはれるとこまるが。――どうだらう、――君、野上のうちのものに遙つてくれまいか？

峰。と、それは？

校　長。いゝえ、まア、一寸顔を出してくれまいか？

峰。顔を？

校　長。すまないが、君……

峰。と、何ですか？――わたしに野上のところへ詫びに行けと被仰るんですか？（色を作す）

校　長。（狼狽てゝ）そ、さうぢやアない。――さういふ意味ぢやアない。――さう取られちやア困る……

峰。でも、あなた……

校　長。いえ、さうぢやアない、わたしのいふのは。――わたしのいふのは双方に。――双方に、まア、いへば誤解……

峰。誤解？

校　長。いえさ、まア、さきにも思ひ違へがあれば此方にも……

峰。此方にはありません。――此方には誤解も思ひ違へもありません。

校　長。それは、まア、さういへばさうだが……

峰。ありません。――わたしのはうには決してありません。――そんなことのある筈がありません。

校　長。でも、これ、さきにいはせると……

峰。さきはさうでせう。――さきにしたらさうでせう……

校　長。だから……

峰。が、そんなことの。――つもつてもみて下さい。――そんな不足がましいことのいつて來られる理由がどこにあります――それからしてさきは間違つてゐます。

校　長。間違つてゐる。――それだけに。――さういふ相手だけにわたしは……

峰。……

校　長。まア、わたしにすると。――わたしにするとことを大きくしたくないと思ふので……

峰。さういふ必要がありませうか？

校　長。そ、さういつたら、峰君、身もふたもない。

峰。なくつていゝと思ひます。――あの子供の、あのおいとゝいふ子供の、あの强情な根性の悪い、可愛げのないところを、この機會に、どこまでもわたしは親たちに知らせてやりたいと思ひます。

校　長。しかし、それは。――それをするには場合が悪い。

峰。どうしてゞせう？――この機會といふくらゐです、わたしはさう思ひません。

校　長。でも、君、田宮のおてるといふものが一方にゐては……

峰。ゐてもいゝと思ひます。――田宮といふ子供も、體ばかり大きくつて、だらしのない泣蟲の、始末にいけない子供ですけれど、昨日は、あの子供に、何の罪科もありません。

校　長。そ、そこだ、君。――野上のはうでは決してさう思はない。――だからいけない……

峰。と、あなたは野上のはうからいつて來たことをそのまゝお取上になるのですか？

校　長。いえ、さうぢやない。――さういふと角が立つ……

峰。でも、あなたは、野上のはうのことばかり被仰つて、わたしのはうのことは。――わたしのはうからは何にも聽いて下さらないぢやアありませんか。

校　長。……

峰。野上のはうのいふことだけ聞くと、わたしが何か、片手落のことでもしたかのやうにしかとれません。――以ての外です……

校　長。が、峰君、――君のやうにさういつても。――すこしは、君、わたしの立場も思つてくれないと……